
このキノコ人間が。

天城春香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

このキノコ人間が。

【Nコード】

N8369V

【作者名】

天城春香

【あらすじ】

或る人物の日常を日記と言う形態を用いて描くものです。物語には起伏があるかもしれませんが、無いかもしれません。この人物は狂い続けるかもしれませんが、まともになるかもしれません。章数は多くなっただけでしたが、どこから読んでもたぶん問題ありません。ご安心ください。

2011年8月15日(前書き)

これは私の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は私が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂いたいただきます。ご了承ください。

2011年8月15日

8月15日(月) 晴れ

今朝、最初に耳に飛び込んできたニュースは、県内に二つしかない動物園のうち、家に近いほうから一匹の猿が逃げ出した、というものだった。インターネットよりも先にテレビで知った。ニュースがインターネットより早く私の耳に入ってくるとは珍しい、と思っていたが、今日はパソコンの電源を入れるより先にテレビの電源を入れていたのだ、ということに、ニュースを知って五分後に気がついた。私は狂っている。

私は狂っている。体内時計が狂っていて昼夜逆転した生活を送っているとかそんなヤワな狂いかたではなく、本当に気が狂っているのである。こんなことを自称しても信じない人が大半だろうが、医師は私を指して「君、気が狂っているよ。すぐに仕事を止めて福祉で暮らさない」と言った。とんでもない医者である。それを聞いた私は市役所へ赴き、福祉の手続きを取り、それ以来福祉で暮らしている。全く、自分が狂っていると自覚している人間を狂っていると認定して福祉として金を提供するとは、とんでもなく狂った世の中である。そしてとんでもなく狂った私である。ちなみに福祉で支給された金は親の財布に収まっている。

私は狂っている。この狂いは、きつと直らないだろう。そんな気がしているのではなく、後で書くがこれには根拠があつて言っているのである。だから私は日記を書くことにした。この狂いが進行すると、きつと私は最初に人の顔が認識できなくなる。次に、絵に描かれた記号としての顔も認識できなくなる。そして最後に、文章も認識できなくなる。文章が認識できなくなると、日記が書けなくなる。この日記が途切れたその日が、私の狂いが極に達した日、とい

うことになる。そんな記録が残しなくなったので、私は今日から日記を書く。日が開いたら、二日分書く。とにかく短くても、毎日分書くのだ。そうしている限り、私は完全に狂ったことにはならない。病院や市からは完全な狂人と認定されて入るが、私の中では、まだ私は完全な狂人ではない。そう考えている。でも狂っている。少しは狂っている。

今日の晩餐にはオムレツが出た。オムレツとは通常、ホテルなどでは朝食として饗されるものである。しかし我が家では、番に出た。何がおかしい。おかしいことなど何も無いではないか。夜にオムレツが出ることの何が変だと言うのだ。私は狂っているが私に食事を饗してくれる母親は狂っていない。狂っていないから働いているのだ。そしてオムレツにはキノコが入っていた。シメジではなかった。シイタケでもないようだった。エリンギでも、当然マツタケなどでもないようだった。味の無いキノコだった。このキノコのせいで、私は狂い続けているのではないか。そんな気はしている。しかし私にそんなことをやる母は、狂っていない。働いているのだから、狂ってなどいないのだ。

2011年8月16日(前書き)

これは私の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は私が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂いたいただきます。ご了承ください。

2011年8月16日

8月16日(火)

母は通訳の仕事が続けている。父はどうなっているのか、最近音信不通なので分かっていない。とにかく働こうとすれば必ずといっていいほど断られるほど狂った私にとって、親の存在は生命線である。つまり私はいわゆるニートと呼ばれているものに分類されるということになる。不本意ではあるがそれが真実となってしまうのだから仕方がない。そんなわけだから、当然近所づきあいなど全くといっていいほど私には無い。ではどうやって一日を過ごしているのかと言うと、恐らく世の大多数のニートと同じである。何もやっていない。いつか罰が当たればいいと思う。親が死ぬクラスの罰が当たればいいと思う。

父は音信不通であると書いたが、別に行方不明なわけではない。私個人に対して音信普通なのである。狂った私に対し、全くコンタクトを取ろうとしない。つまり私は肉親に無視されているのである。それほど狂うということは罪深いのか、と考えたが、確かに罪深い。親は私が生まれたとき、きっと私に期待をかけただろう。将来は狂った人間にきつとなれよ、とは間違っても願わなかっただろう。私は死んだほうがいいかもしれない。ああ、嫌になる。こんなことに対する意見ばかりが正常だ。

明後日は人と会わなければならない。私のように狂ったもの同士が保健センターのサロン(なんとという言葉を使うのだ)に寄り集まるのである。寄り集まって何をするのかと言えば、なにも建設的行為を行わないのだから困りものである。とにかくひどい。何も起らない、という事実がひどい。そんな集まりがあさってに控えている。

昨日書いている途中に書くことを忘れてしまっていたが、私が狂っている原因とは何だろう。ところで突然話は変わるが、今日の晚餐として饗された牛井にも、無味の私の知識には無いキノコが入っていた。私はこれを食べた。母親が作った牛井に入っていた無味のキノコを食べたのである。なぜなら、私に食事を残す権利など無い。狂った人間が親に逆らうと社会的制裁を食らうのである。根拠は無いがきつとそうだ。ところで私が狂っている原因とはなんだろう。

2011年8月17日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂きたく。ご了承ください。

2011年8月17日

8月17日(水)

今日は外に出た。ということとは、昨日は家から出なかった、ということだ。昨日の日記が家庭内の事情の描写に終始していたのはそのためである。ともかく今日は外に出た。しかも日中である。狂った奴が日中に出歩くと善意の普通の人と視線が衝突して酷い目に遭う。そうに決まっている。と覚悟を決めていたかもしれない。私が住んでいたのが都会であったのならば。しかし私が住んでいるのは宮崎県という行けども行けども田舎が続く土地であるため、平日の日中に外に出ても人と会うことは少ない。この点に関してだけは、宮崎と言う土地に感謝している。しかしきつと近所での私の評判はすこぶる悪いに違いない。だって狂ってばかりで稼いでいないのだから。近所の普通の人から話を聞いたわけではないが、そう思われているに決まっている。

宮崎という田舎であっても、コンビニくらい存在する。ちなみに宮崎にローソンが来たのは90年代末である。田舎だ。実に田舎だ。悪いことは言わない、田舎暮らしなんかには憧れないほうがいい。といっても狂った人間の忠告など誰も聞かないか。それにしても誰に見せるつもりも無いのに、私は誰に忠告しているんだ。エア友達か。ともかく私は家から出て、コンビニに入った。そしてコンビニに入ってしまったと、酒のコーナーに向かってしまった。そして親の財布から抜き取った百円玉を使って酒を買ってしまった。飲んでしまった。そしてコンビニを出て三十歩歩き、吐いた。酒に関わるということだ。今度からは飲まないように気をつけなければならない。

宮崎という田舎の平日でも、たまに人とすれ違う。今日は一人とすれ違った。その人はすれ違いざまに私に視線を向けた。寝癖を見

たのだろうか、それとも狂った人間が珍しいのだろうか。私のように誰が見ても狂っていると分かる人間は、珍しさに違いない。都会だったらきつと、狂った人間が数多く闊歩しているだろうか、私が特別に視線を向けられることなく済んだだろう。田舎が憎い。都会が羨ましい。田舎で死にたくない。都会の雑踏の中で死にたい。そしてきつと、「こんな街中で死ぬんじゃねえ」と悪態をつかれるのだ。それでも田舎で死ぬよりずっといい。

昨日に続いて今日も晚餐は丼ものだった。親子丼だ。鶏肉がささみしか使われておらず、しかも硬い。狂った人間には豪華すぎる食事である。卵と鶏肉と玉ねぎのほかに、キノコが入っていた。味は無かった。昨日のキノコと同じキノコだ。

2011年8月18日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂きたく。ご了承ください。

2011年8月18日

8月18日(木)

本を読むときは必ず没頭するようにしている。そうしていないと私はもつと狂うしかやることなくってしまう。何でもいいから何もしないよりは何かやれ、とは母親の口癖である。……だった。でも今はあまり言われない。諦められているのか、それとも呆れられているのか。

今日は保健センターのふれあいサロンへ行く日なので、母に送ってもらって保健センターへ行った。サロンといってもやることといえば私のように狂った人たちが集まって喋ったりボードゲームをやったりするだけの集まりである。私は喋ることもボードゲームも得意ではないのでいつも本を持っていく。そしてずっと本を読む。喋りもせずに、人を見もせずに。きつとこの日記を誰かが見ているとしたらきつと私のことを軽蔑するだろう。狂った私でもそのくらいのことは予想ができるのである。

サロンから帰ってきてパソコンを開いていたらメールが届いていた。そこには「あなたの書いている日記について、お話したいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来て下さい」と書かれていた。差出人の名前はどこにも書かれていなかった。怖かったのですぐに削除した。

今日の晚餐は豚キムチが出た。ご飯と豚キムチ、それだけである。味噌汁などと言うぜいたく品は私の食事には出ない。今日もその中に昨日と同じ形状のキノコが入っていた。もしかしたら私が狂う原因も、夕食後に必ず数時間意識を失ってしまうのも、このキノコが原因かもしれないと思い、今日は思い切って残してみた。するとキ

ノコだけ残った皿を見て母が「食べなさい」と言った。働いていない私には拒否権など無い。そんなネット内の世論のような言い方だった。その通りなので仕方なく食べた。そして今日もまた、さっきまで意識を失ってしまっていた。きつと私はもつと狂うだろう。そして文章を書くために保っているなけなしの正気も失い、この日記は終わるのだ、きつと。

2011年8月19日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂きたく。ご了承ください。

2011年8月19日

8月19日(金)

もうすぐ週末が来る。嫌だ。週末になれば狂っていない人々が外を出歩くだろう。そしてそれらの人々は、狂った私のことを注目するだろう。だから私は外に出られなくなる。家の中に閉じこもって読書とインターネットばかりやっていなければならなくなる。最近読書をしていてもインターネットをやっても気分が悪くなる。暗い気持ちになる。これは狂いが進行した証なのだろうか、それとも常人に近づいている証なのか。どちらにしても嫌だ。狂うか鬱になるかの二択。どちらも嫌だ。

今日読んだ本には。狂った人間が出てきた。しかし最後には大人になって、狂いから脱した。タイトルは「時計仕掛けのオレンジ」といった。若いということは狂っているのだろうか。だとしたら私ももっと歳を取れば、狂った状態から開放されるのだろうか。歳を取っても狂い続けるとしたら、そんなひどい悪夢は無いように思える。そうなるくらいなら、狂いが臨界点に達して何も認識できなくなる時期が早く来てくれたほうがいい。読書をして心も豊かになった気がしない。これは本が本だからだろうか、それとも私のせいだろうか。近頃、悪いと感じることが全て自分のせいであるような気がする。

「お話ししたいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来てください」昨日削除した匿名のメールの文面がまだ思い出せる。「お断りします」とか返信くらいしておくべきだったかもしれない。もし本当に来週の月曜日にドン・キホーテに行ったら、誰かが待ち構えているのだろうか。それともいたずらだったりするのだろうか。どっちがいいか、と訊かれれば、どっちも

気が重い、と私は答える。だからセルシンを一錠余分に飲んだ。特に何も変わらなかった。

晚餐にキノコ鍋が出てきた。エノキやシイタケやシメジや白菜に混ざっていつものキノコも浮いていた。何の工夫も無い、私にキノコを食べさせるための食事だった。母は勝手に私の取り皿に、いつも私に食べさせている味の無いキノコを入れた。やけになって馬鹿食いした。満腹になって眠くなった。だからさっきまで寝ていた。この怠け者。死ね、私め。

2011年8月20日(前書き)

これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂きたく。ご了承承ください。

2011年8月20日

8月20日(土)

昨日の「時計仕掛けのオレンジ」で図書館から借りた本を全て読み終わってしまった。読む本がなくなるということは、インターネットしかやることがないということであり、インターネットしかやることがないということはインターネット内のふとした書き込みが気になって気分が沈んでしまう危険性が増えるということであり、それを避けるためには私は図書館へ行かなければならなかった。私に本を買う経済力など無い。狂った人間にお小遣いを渡すような親も私の家にはいない。親の財布は鍵のかかる化粧筆筒の引き出しの中に入れてしまっていた。週末は外に人の目が増えるので外出は避けたい、と昨日書いたが、仕方がないので目を伏せながら家を出た。

そして自転車に乗って図書館を目指した。母と兼用の、錆び落としが欠かせない十年以上使っている自転車である。自転車は好きではない。周囲の景色が流れるのが早すぎて混乱してしまうし、何より転ぶとほぼ確実に怪我をしてしまうからだ。しかも死なない程度の怪我だ。車に轢かれて死ぬよりつらい目に遭うことになる。だから自転車は好きではない。乗れなかつたらよかつたのに、と思うのだが、幼稚園児の頃、まだ両親が私に期待していた頃に、私は練習してしまい、自転車が乗れるようになってしまった。だから仕方なく自転車を使って、本を返却して新たに数冊の本を借りた。カウンター越しの相手なら声を出すのは平気だ。このあたり、私がまだ正気を保っているような気がしてほっとする。

「お話したいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来てください」木曜日にパソコンに入っていた匿名のメ

ールがまだ記憶から消えない。メールマガジン以外のメールが届くことは稀だからだ。いや、初めてだったかもしれない。私はパソコンを使っていてよかったと思えたことがまだ一度も無い。それなのに、毎日パソコンを開いている。そしてインターネットを覗いている。あまり楽しい趣味ではない。でも、他にやることが無い。楽しくなる方法を検索すればインターネットは楽しくなるだろうか。

今日の晚餐は焼きそばだった。それなのにまたキノコが入っていた。どうしてキノコが入っているんですか、と私は母親に敬語で尋ねてみた。母親は私のことを無視した。ついに私は家族全員から無視されるようになったのだ。ついに、などという言葉を使ったところで嬉しくもなんともない。

2011年8月21日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂きたく。ご了承ください。

2011年8月21日

8月21日(日)

ふと思い立ち、ヤフー知恵袋に「味の無いキノコって存在しますか」と書き込んでみたが、反応が怖いので書き込んで以来まだそのページを開けずにいる。これは狂っているのではなく、単に私が元来臆病なだけである。そしてこのまま放置し、忘れかけた頃に除いてみて何の反応も返ってきていないことに少しだけ落胆し、また「私は狂っている」などとこの日記に書くのだろう。だから私はこの書き込みを自分の記憶から消すことに決めた。

今日は日曜日であり、外に出ると人の往来が平日より激しく、つまり狂っている私を奇異の目で見る眼球の数が増えるのである。だから私は外に出ないことに決め、本を開いた。しかし集中できなかったので、座禅でも組んでみることにした。あまりにもくだらない行為である。しかし私にはもう、くだらないことくらいしかやることが無いのだ。そして座禅は十分足らずで挫折した。あまりにも頭が静かになって狂いが加速しそうになったからだ。文字や動画や音楽といった刺激を常に与え続けていなければ狂うような気がして、読書やインターネットを中断するのが怖い。まるで怠け者の言い訳である。

「お話したいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来てください」試しに何も見ずに木曜のメールの文面を思い出してみたところ、ほぼ完璧に記憶できていたので自分でも驚いた。明日はドン・キホーテに行ってみよう、と昨日より精神の調子がいい私は決断してみた。しかしこの決断も明日の朝には鈍っているかもしれない。

それにしても、ここまで書いたものを読み返してみると、今日の私はまるで正気のようなのである。ということは、当たり前だが私は狂っていないということになり、狂っていないのに働いていない私はただのカスということになる。いや、狂っているから働けないなどと言っている奴もカスである。つまり私はカス呼ばわりされる運命から逃れられない、ということになるのか。こんなこと、とてもインターネットに書き込んだりなどできない。ただの泣き言じゃないか。

夕食は饗された。しかし母親はまだ私のことを無視し続けている。夕食に出たのは塩鯖だった。キノコはどこへ行ったのか、と思っただら小鉢にキノコが入っているものが鯖の隣に置かれていた。食べなかったら今度はどうなるんだろう、と考えながら、私はおとなしく出されたキノコを食べた。やはり味は感じられなかった。

2011年8月22日(前書き)

これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂きたく。ご了承承ください。

2011年8月22日

8月22日(月)

目覚めた私はバイパス下のドン・キホーテへ向かった。「お話し
たいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに
来てください」という、先週木曜日に送られてきたメールの文面が
まだ忘れられなかったからだ。到着してから、もし来なかったらど
うなっていたのだろう、と考えた。そして何者かが家に襲いに来る
のではないかという被害妄想に達してしまい、私は震えた。そんな
ことを考えながらドン・キホーテを歩き回った。この店には物とい
う物が詰め込まれていて、この近所に済んでいる人間は買い物に
困ることは無いだろう、と思われた。しかし金銭を少しも持ってい
ない私にはこれらの積み上げられたものが全て無駄に思えた。どう
せ買えないのだ。

午後になっても、何も起こらなかった。もしかして私が呼び出し
た人物を特定して話しかけなければならぬのか。狂った末にコミ
ュニケーション能力を失ってしまった私にそんな高度なことが可能
なのだろうか、いや不可能だ、と帰る時間を計算して焦り始めて私
は考え始めた。すると、背中に何者かの気配を感じたので、私は振
り向いた。しかし何者かは私の視界から外れた。逆方向に振り向い
た。何者かはそれでも私の視線から外れた。何度振り向いても、一
回転してみても何者かは私の背後の視界の外から出ようとしなかつ
た。姿を見せずに何をするつもりなのか、分からなくなった私は恐
ろしくなって入り組んだ店内を転びそうになりながら駆けて、店か
らも出て自転車に飛び乗り、振り向きもせず一目散に家へと帰っ
た。そして自室に飛び込んだ。もう自室から出たくない、という気
持ちが、自分の部屋まで戻った私を支配していた。

それでも晩餐のためには部屋から出るしかなかった。私に饗される食事は夜の一食のみである。食べなければ死んでしまう。例えばキノコが混じっていたとしても。今日の晩餐はカレーだった。当然のようにキノコが混ざっていた。諦めの境地に達していた私は、キノコ入りのカレーを腹に押し込んで自室に急いで戻って横になった。

2011年8月23日(前書き)

これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂きたく。ご了承ください。

2011年8月23日

8月23日(火)

あれは確か火曜日の深夜だったか。だから水曜日の日記に書いてもいい事柄だ。

私は深夜、外を出歩いていて。田舎の深夜は通行人がほぼ皆無なので安心して出歩くことができる。しかしその日は、安心できないようなものと出くわした。それは猿だった。野性の猿か、と思ったが、ずいぶん前に動物園から猿が逃げ出したというニュースをテレビで見たことを思い出した。猿と目が合った私は、歩みが止まった。猿も動きを止めた。しばらく睨み合った私と猿は、数分間静止していただろうか。双方とも、どちらからとも無く視線を外し、それぞれ別の方向へ歩み去った。通報したほうがよかったのかもしれないが、深夜だし、私は狂っているし、それは無理だ。

帰るとメールが届いていた。「はじめまして。猿です」で文面が始まっている上に匿名だったのですぐに削除した。どうも最近、不審な人々に私のメールアドレスが駄々漏れしている気がする。何か嫌なことの前兆でなければ良いのだが。

昼間、一人部屋でじっとしていると、自分がすごく罪深い人間であるような気がしてきた。なので、自分に罰を与えたほうがいいのではないか、と思い立ち。しかし有効な方法がすぐに思い浮かばなかった。壁に頭をぶつけてみた。ごん、と大きな音がした。家中に音が響き渡ったに違いない。しかし、在宅で通訳の仕事をしている母から咎められたりすることは無かった。ずっと無視されているのだ、当たり前だ。私はもう期待もされていないのだ、当たり前だ。死んだほうがいい、と思った。しかし、死ぬ勇気が出なかった。保留である。駄目だ。私はダメだ。

また匿名のメールが届いていた。「昨日は楽しいデートでしたね」と書かれていた。昨日、誰かに会ったか、と思い返してみたが、ドン・キホーテで姿を見せずに私の背後を付け回した人物しか思い浮かばなかった。あれがデートだと言える頭があるなら、その人物は十分狂っている。私より狂っているかもしれない。そういえば明日は病院へ行く日だ。病院へ行って狂いを治療するのである。もう二年くらい通っているが、ただ薬を処方されるだけで、一向に狂った頭が改善される兆候は見られない。あの病院はヤブなのではないかと私は少し思っている。

昨日書き忘れたが、私は背後を姿を見せずに付いて来る謎の人物に、一言だけ声をかけられた。「あなたはきつと治らない」と一声。その言葉には十分な説得力が会った。自分でも自分の狂いが治ると思えなかったからだ。そんな些細なことは覚えているのに、今日の夕食は覚えていなかった。キノコを口にしたことだけは覚えているのに、献立は思い出せない。

それと言つのも、ついさつき、冷蔵庫から酒を勝手に奪って飲んだからだ。数分前まで、私はいいい気分になっていた。その拍子に晩に何を食べたのかを忘れた。だから今日の日記は時系列がとっちらかっている。明日はちゃんと書こう。読み返したときに意味不明では困るから。

2011年8月24日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂きたく。ご了承ください。

2011年8月24日

8月24日(水)

起きると、一階から家族のものではない男の声が聞こえた。それが誰なのか、私にはすぐに予想がついた。母の担当編集者である。母は週に一度か二度、定期的に編集者と居間で打ち合わせをしている。とても部屋から出られない。狂った私などを見知らぬ他人に見せて編集者を不快にさせて編集者が母に近寄らないようになって母の仕事が減って収入が減ると夕食すら出してもらえなくなるかもしれない、そうなると私は苦しい餓死を体験しなければならなくなる、そう思った私は、編集者が帰るまで自分の部屋の自分の布団の中でうずくまっていた。一生そうしていたかったが、編集者が帰ったのと今日は用事があつたので昼ごろには布団から出た。

用事とは通院である。狂った私は狂いを矯正するための薬の処方箋を貰いに行くために、二週間に一度病院へ行かなければならないのである。診察には期待していない。いつも「何か変わったことはありませんか」「何も起こりませんでした」「そうですか。ではお薬出しておきますので」で終わってしまうからだ。きっとあの病院は収入源確保のために私のことを狂っていると診察し続け、処方箋を出し続けているに違いない。でも今は実際狂っているので通わなわけにはいかない。もし治ったら盗られた金額分の復讐をしに行こう。私は狂った頭でそう思った。

そんな気持ちに支配されていたからか、午前中ずっと寝ていてそれから起きてすぐ外に出たせいで気分が悪くなったのか、それとも昨日盗み飲んだ酒が残っていたのか、今日の晚餐は食べ終わってすぐに吐いた。吐いたものの中には原形を保っているキノコが含まれていた。いつぶりだろう、私がキノコを消化吸収しなかったのは。

2011年8月25日(前書き)

これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂きたく。ご了承ください。

2011年8月25日

8月25日(木)

生活そのものに価値と言うものが数値として示されたりすることの無い世の中でなくて本当に良かった、と思う。そんなことになったら人々の生活の価値の数値で順位が生まれてしまうし、私のような人間の生活などにはとても低い数値がつけられて凹んでしまうだろうし、激情家が低い数値を付けられたりなんかしたら怒り狂ってきつと犯罪に手を染めるだろう。それも派手な犯罪だ。だから人間の生活が数値化されていなくて本当に良かった、と思う。思ったからどうなんだ、とは聞かないで欲しい。ただ思いついたただだから

今日は木曜日なのでふれあいサロンへ連れて行かれた。ふれあいサロンでは交流会が行われていて、参加者にはお菓子が配られたりフルーツポンチを作って食べたりなぜか「上を向いて歩こう」を合唱させられたりした。「上を向いて歩こう」は嫌いな歌だ。なんだか皮肉に聞こえる。それに上なんか向いたところで手の届かないものばかりが目に入って気が重くなるばかりである。そんな歌じゃないことくらいは分かっているが。

帰ってきてパソコンを開くと匿名のメールが届いていた。「先日のデートは楽しかったですね。次のデートは日曜日にしましょう」とだけ書かれていた。私にはデートなどと言う高等で狂っていない人間がやることを行った覚えなど無い。きつと間違いメールだろう。日曜日にドン・キホーテで私を付回した人物から送られてきたメールだとしたら。だとしたら、不気味すぎて思わず震えてしまうだろう。狂っているが故に社会的な力を何も持つことを許されない私にはそのくらいしかできないのだが。

今日の晩餐にはキノコの丸焼きが出された。まるで私が昨日キノコを消化せずに吐いたことを知っているかのような献立である。そういえばキノコを食べずに迎えた今日は、やけに調子がよく、ちょっとした考えまで生まれ、気持ちも心なしか前向きになっていた、ような気がする。しかし、キノコの丸焼きを食べないわけには行かなかった。もしかしたら、と気体を込めて口に入れてみたが、やはり味の無いキノコだった。吐かなかった。

2011年8月26日(前書き)

これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂きたく。ご了承ください。

2011年8月26日

8月26日(金)

早朝、まだ父も母も妹も起きていない時刻に、冷蔵庫から酒を盗み飲み、昼まで寝ていた。昼間、母が部屋に閉じこもって翻訳の仕事に精を出している隙に、また冷蔵庫から酒を盗み飲んで夕方まで寝ていた。こんなに無駄に過ごした一日はそう無いだろう、と思う。そして私はきつと夜も眠るのだ。他にやる事が無いんだから。

ハローワークにいかなくちゃ、と起きている間に(酔ってはいたが)私は思った。働かなければ私は一生狂ったままだ、と感じたからだ。でもそう決意してからすぐに、私は酒を飲んでしまった。狂いたいのが正常になりたいのか、自分でも自分に問いたい。そして問いかけたところでちゃんとした答えは返ってこないだろう。何せ酔っていたのだから。

酔っていて記憶が曖昧なのだが、どこかに電話した気がする。どこに電話したのかは覚えていないが、「月曜日に来てください」と返された。月曜日はどこかに出かけようと思う。どこに出かけるのか見当も付かないが、明日には思い出せるんじゃないか、と私は未来の私に余計な期待をかけた。

酔っていて眠っていたせいで、晚餐には出られなかった。深夜、ようやく酒が抜けて目が覚めて、トイレに行こうと部屋を出ると、扉の前にキノコを茹でて刻んだものが皿に盛られて置かれていた。酒のせいで空腹だったのでこれを食べた。すると意識が朦朧となつて、トイレに行ったのか行かなかったのか分からないまま、私はついさっきまで寝ていた。これを書いている今も、起きているのか起きていないのか自分では判断できない。でも、狂ってはいないと思

う。馬鹿になっているのだ。

2011年8月27日(前書き)

これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂きたく。ご了承ください。

2011年8月27日

8月27日(土)

昨夜食べなかったせいで、空腹で眠れなかった。そこで早朝、冷蔵庫に何か食べるものは無いかと漁ってみたがそのまま食べられそうなものは見当たらなかった。生野菜、パックのままのハム、バター等。仕方がないのでテレビをつけるとアニメでカードの対戦をやっていた。勝たないと人類が危ない、らしい。カードゲームで遊ぶ相手が居て羨ましい、と思っていたら窓の外に猿の姿が見えた、気がした。早朝だし、寝ぼけていたせいで見えた幻覚だろう。空腹を紛らわせるために部屋に戻ってまた布団を被った。

昼間、パソコンでインターネットをやっているとメールが届いた。匿名だった。「猿です。遊びませんか？」とだけ書かれていた。昨日の人物からだろうか。本当に去るからメールが送られてきた、と言うことはあるまい。どうしようもないので無視して削除し、このメールをこなかったことにした。しかしこうして日記に残してしまつた。この段落を消すべきか、書いている今も悩んでいる。

酒の効能を思い知り、もっと飲みたいと思つた。しかし飲むと馬鹿になる。その証拠として、酒に酔つたまま書いた昨日の日記は馬鹿みたいだ。だから我慢しなければならぬ。いや、狂っているよ。酔つた馬鹿で居るほうがいいのかもしれない。そう考えるとますます飲みたくなつた。しかしこれ以上勝手に飲んだら家族にばれちゃう。ただでさえ言葉を交わしてくれない家族が酒を盗んでいるという事実を知ったらどんな手段に出るのか。考えるだに恐ろしかったので、私は気合を入れて我慢した。息を止めたり、腕立て伏せをやって無理矢理疲れて昼寝してみたりした。

昨日電話したところを、夕方になって思い出した。何の前触れも無く。急に思い出した。私が電話した先はハローワークだった。「月曜日に来てください」と言われたということは、私は月曜日にはハローワークへ行かなければならない。しかし狂った私が今更ハローワークへ行つたところでまともに仕事を見つけることなどできるのだろうか。到底そうは思えない。しかし約束してしまった。約束を破るのは怖い、これ以上人を失望させることは怖い。月曜日にはハローワークへ行かなければならなくなってしまった。

晩、昨日は何も口に入れなかったせいで食事をいつも倍のスピードで食べてしまった。いつものように味の無いキノコ（恐らく私が狂っている原因）も入っていたが、構わず食べた。食事にがっつく私の姿は、浅ましかった。母はそんな私をただ無言で睨んでいた。父と妹は、私に視線すら向けなかった。

2011年8月28日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂きたく。ご了承承ください。

2011年8月28日

8月28日(日)

家に知らない女の子が訪ねてきた。誰も対応しないので仕方なく玄関に向かった寝起きの私に向けられた女の子の一言は「さあ、遊びましょう！」だった。滝本竜彦の小説が思い出された。その人物の小説どおりの展開だと私はやたらと自罰的な人物と言うことになってしまう。自分のことを狂ってる狂ってるこんな風に日記に書き続けている私は自罰的な人間なのか。そうなのかもしれない。そう考えながら私はぎこちなく女の子と話し、おっかなびっくり一緒に遊んだ、その内容については詳しく書かない。子供がやるような他愛も無い遊びで、そのあまりの幼稚さに泣きそうになった、とだけ書いておく。

女の子がやってきたのはきつと幻覚だったのだ、さっきまで一緒に遊んでいたのも幻覚だったのだ、と私は夕方、女の子が帰ってから思った。しかし私の手元には女の子から手渡された箱があった。誕生日プレゼント、とのことだった。私の誕生日は既に通過した水曜日、つまり23日だ。遅すぎやしないか、と訊いてみたかったが訊けなかった。「ああそう、じゃあいらないね」と言われて手元から奪い取られるのを恐れたから、かもしれない。自分でもどうして素直に受け取ったのか理解ができない。

箱を開け、誕生日プレゼントを腕に巻いてみた。似合っているか似合っていないかで言えば、不釣り合いな代物だった。しかも私は特別に用事があるとき以外は外に出ないので、家の壁にかけられている時計で事足りてしまう。女の子には申し訳ないが、このプレゼントは無意味だ。

そういえば、女の子の名前を聞いたのか、聞いたとして覚えているのか自分でも分からない。今思い出そうとしても、出てこない。あれは本当に幻覚だったのかもしれない。じゃあどうして手元に腕時計があるのか。それは知らない。

死ぬ夢を見た。死のショックで目を覚ますと深夜だった。もう晚餐は出ないだろう、と予想しつつも、もしかしたら、と期待して居間に下りてみると、何の用意もされていなかった。私は絶食しなければならぬようだ。餓死が冗談では済まされなくなってきた。

2011年8月29日（前書き）

これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂きたく。ご了承承ください。

ろう。

晚餐にはオムライスが出た。もちろん味の無いキノコが混入されていた。味が無いくせに、そのキノコが喉に入ると急に吐き気がこみ上げてきた。しかし食卓で吐いたらきつと後処理は自分でやらなければならなくなる。自分のものとは言え嘔吐物の後処理は嫌だ。だから頑張って全部飲み込み、トイレに入ってすぐ吐いた。きつと明日も栄養失調だ。

2011年8月30日(前書き)

これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂きたく。ご了承承くください。

2011年8月30日

8月30日(火)

起きると足がふらついた。何も食べていないせいである。しかし、キノコを食べて狂い続けるのと、こっぴどくキノコを消化するのを拒否し続けてやがて餓死するのではどちらがましだろう。少し考えてみた。キノコを食べずに正気でい続けたほうがいいのかもしい、という考えが頭に浮かんだ。私の死期は近づいているのかもしれない。

窓から空を眺めた。キノコを消化せずに眺める空はいつもより青く見えている気がして、空を見るくらいしかやることの無い自分の立場に珍しく危惧を抱いた私はハローワークへ向かった。しかし、私の担当者(昨日決まったらしい)は月曜日と金曜日にしか出勤していないので今日のところは帰ってください、と言われてしまった。私はこの正気でいられる時間をどう使えばいいのだろう、と悩みながら家に帰った。

家に帰ったのを狙い済ましたかのように、家の電話が鳴った。翻訳作業が忙しい母がいつまで経っても電話に出ないので、私が出てみた。すると少女の声が「はい、私です」と名乗った。誰なのかわからないので名前を訊くと、「昨日のメールに書いたけど?」と帰ってきた。昨日のメールには確か名前が書いてあったはずだ。思い出そうとしたが思い出せなかったのでこちらから尋ねると、「榎本なごみだよ」と帰ってきた。どうして電話してきたのか尋ねてみると、「あなたが出ると思ったからね」と帰ってきた。どういうことか分からなかった。どうして私が出ると思ったから電話したのか、私にどんな用事があったって電話してきたのか、さっぱり分からなくなり、もしかこの榎本なごみ(何度も書かないと忘れてしまう)

なる人物は私を騙そうとしているのではないか、いや自由に使える金を少しも持っていない私を騙してどうする気だ、笑うのか、嘲笑するのか、そんな頭のおかしい考えが続々と浮かんできて怖くなつたので私は電話を切った。するとすぐに電話が鳴った。取ると、「ひどいな、急に切るなんて」と榎本なごみの声が聞こえたので私は受話器を叩きつけて部屋に戻って布団を被って夕方まで震えていた。

そして夜になり、晚餐の出る時間になった。ひじきの煮物の中にキノコが刻まれていた。昨日はこれを消化しなかったから調子がよかった。しかし調子がよかったからと言って良いことは何一つとして起こらなかった。狂っていたほうがまだ、狂っていることに頭を抱えていたほうがまだ、そう考えた私はキノコごとひじきの煮物を口に入れた。

2011年8月31日(前書き)

これは作者の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせて頂きたく。ご了承ください。

2011年8月31日

8月31日(水)

朝、起きると私は狂っていた。まるで現実が幻覚に用に見えていた。空の色も昨日ほど青く見えない。昨日の日記を読み返してみると、まるつきり普通の駄目な人間の生活そのものが書かれていた。狂っていないと私はこんな感じの生活を送ることになるのか。怖くなったので、私は日記をすぐに閉じた。これからは日記を書くときはキノコをちゃんと食べよう、と心に固く誓った。常人のまま駄目人間と言われるくらいなら狂った駄目人間と呼ばれるほうがましである。

部屋の中のものが壊されることに恐怖を覚える。例えば、日曜日に榎本なごみから貰った腕時計、これが壊れることを考えただけで私の胸はまるで悪い相手に恋しているかのように締め付けられる。実際、昼寝中に、何者かに腕時計を壊されるという夢を見た。それがあまりに恐ろしかったので、ショックで目を覚ましてしまった。目覚めると窓の外に猿がいた。ずいぶん前に動物園を逃げ出した猿のように見えた。というか、ここに猿がいる理由で最も納得できるものがそれだった。窓を開けて追い出そうとすると、猿が喋った。「あなた、お暇そうですね。退屈な生活、大変結構。羨ましいものです」きつと夢に違いなかった。

それから、いつ目覚めたのか、自分でも分からないが、とにかく晩になった。晚餐にいつものようにキノコが入っていたので私はむさぼるようにこれを食べた。悪夢を見てしまうのも、現実ではないようなものを現実のように認識してしまうのも、私の狂いかたが足りないせいだ。私よ、もっと狂え、そしてこんな悩みなど感じない身体になっしまえ。

2011年9月1日(前書き)

これは作者の日記ではありません。あくまで創作でありフィクションです。私は正常な人間です。

2011年9月1日

9月1日(木)

起きると、と言ってもそれまで寝ていたわけではない、だからと昼近くまで布団に寝転がって暇つぶしをしていたのだ、とにかく起きると、階下から母と男の声が聞こえた。情事の声などではない。私は母の浮気現場など想像したくも無かったし、大体母に浮気できるほどの魅力があるとも思っていない。とにかく、階下から母と男の声が聞こえた。男の声には聞き覚えがあつた。それは毎週家に来ては母と打ち合わせをしている編集者の声だった。母と男は今度母が翻訳する本について話し合っているようだった。その詳細については、ここには書き記せない。話半分しか聞いていなかったし、もう夜になってしまった今となっては、何を言っていたのか一言も思いつくことが出来ないからだ。

それに、ちよつとした事件が起こつた。母と編集者の声が途切れたと思うと、階段を上ってくる音が聞こえてきた。そのとき、二階に居たのは私だけだった、と思う。二階には私の部屋と妹の部屋と母の仕事部屋があるのだが、妹は学校へ行っているし、母はもちろん私の部屋の真下の居間に居るので、私しか居ないことは明らかだった。それなのに足音は階段を上ってくる。誰だ。きっと編集者だ。何の用があるんだ。少なくとも私に用があるわけではないだろう。母は編集者に私の存在を、私が狂っているという事実を隠しているはずだから。

ところが、足音は私の部屋の前まで来て、扉をコンコンと叩いた。「入ってますか？ 入ってますよね」と言つて、了解も得ずに編集者は私の部屋に入ってきた。あまりにも突然の出来事だったので私は呆然としていた。私の部屋に、見ず知らずの男が、無許可で闖入

してくるとは。何をするつもりなんだ、と訊きたかったが見知らぬ人間が怖かったので私は何も言えずにいた。すると編集者は調子付いたのか、私の机の上においてあった、榎本なごみに貰った腕時計を手に取った。「いやあ、いい腕時計だ。実にいいものだよ、これは。」

「君には勿体無い」そう言って編集者は腕時計を握りつぶした。私はしばらく、何が起こったのか分からなかった。呆然としたままの私を置いて、編集者は部屋を出て行った。後に残ったのは微かな煙草の臭いとガラクタになった腕時計だけだった。

そういえば、今日はふれあいサロンへ連れて行かれる予定の筈だったのだが、母は私に話しかけてくることは無かった。私も、別に行かなくても問題は無い、と考えていたので何も起こらなかった。とにかく、物を壊されたことだけが鮮明に頭に残っていた。

私は自分の持ち物が壊されることに恐怖を覚える。そんなことを昨日日記に書いた。すると、それが予言であったかのようなことが起こった。これは何だ。何なんだ。私の日記には妄想を現実にする力でもあるのか。そんな気の狂ったことを考えてしまったので、今日は晚餐を食るように食べた。キノコが混じっていたが、それも含めて食るように食べた。もっと狂え。もっと狂って、こんな痛みなど感じないようになってしまえ、私よ。

2011年9月2日(前書き)

これは作者の日記ではありません。創作です。創作に決まっています。

2011年9月2日

9月2日(金)

今、起きたところである。今が現実なのか夢の中なのか、狂っている私には判断できない。しかし机の上には壊れた腕時計が置かれている。昨日、編集者に腕時計を破壊されたことは事実のようである。いや、その事実を認識している私も夢の中にいるのかもしれない。そう考え出すと混乱してきた。だからこれ以上気にしないことにして、今日、起きているか寝ているかの間に起きた出来事をここに書く。

榎本なごみが訪ねてきた。彼女は誰に案内されるでもなく、自発的に、言い換えれば自分勝手に家に上がりこんできた。そしてそのまま階段を上って、私の部屋に入った。彼女が最初に気にしたのは壊れた時計である。「壊しちゃった?」と、榎本なごみは尋ねた。「違う、昨日母の担当編集者に壊されたのだ」と、私は真実をありのまま伝えた。「そっか」榎本なごみは怒りもしなかった。自分がプレゼントしたものが勝手に壊されたというのに。「負けちゃダメだよ。狂っちゃダメだよ」と榎本なごみは言った。何に負けるといふのか、私が狂ったところで何の不都合があるのか、私には納得できなかつた。しかし私が何を言い返したのか、ここで記憶が途切れているので分からない。とにかく、榎本なごみは晚餐の時間より前に帰った。それだけは覚えている。

「キノコは食べないほうがいいよ」と、どのタイミングで言われたのか思い出せないが、とにかくそう榎本なごみに言われた。「食べなくても死なないよ。死にそうになったら警察に駆け込めばいいよ。いいや、食べなかつたら私は死ぬ。晚しか食事を出してもらえないのだから。私はそんな感じの反論をした、ような気がする。そ

れに対して榎本なごみがどんな反応を返したのか、それも思い出せない。きっと昨日キノコを馬鹿食いしたせいで、記憶能力が狂ってしまったているのだろう。

今日の晩餐の内容も思い出せない。しかし、きっとキノコが入っていたのだろう。今も私は狂っているから。

2011年9月3日(前書き)

この日記はフィクションです。作者は正常な人間です。こんな生活はしていません。

2011年9月3日

9月3日(土)

パソコンでインターネットに興じていると、猿脱走のニュースが再び報じられていた。未だ行方は不明なり、とのこと。ちなみにこのニュースは地域ニュースのページで見かけた。暇な私はそんなうでもいいページすら閲覧するのである。インターネットに載っている情報などほとんどがどうでもいいものである、と言う人も時々あるが、間違つてはいないと思う。ニコニコ動画や2ちゃんねるを閲覧していると、特にそう思う。

今日が土曜日だったことを午後になってやっと思い出し、先週もそうしていたように母と兼用の自転車を駆って図書館へと向かった。そこで本を返却し、本を借り、無料の給水機で大量に水を飲んだ。家で飲む水道水は残暑のせいなのか、ぬるいのである。家で飲めるものと言えば水道水か、無許可で飲む酒くらいしか無い。ほとんどの家にあるという、冷蔵庫で冷やされた麦茶は我が家には存在しないのである。

家に帰ると母と聞き覚えのある男の会話が聞こえてきた。男の声は編集者のものだった。腕時計を壊された記憶がまだ鮮明に残っていたので、私は家には入らずに自転車をUターンさせて、本屋で立ち読みして時間を潰した。冷房が効いているとはいえ、何時間も立ちっ放ししていると、寝すぎて体力の低下した私は倒れそうになった。しかし、あの変な編集者と同時に家に居ることなどできなかつた。来週から編集者が来たときはどうするべきか、私は真剣に検討する必要があつた。

立ちっ放しで何時間も立ち読みしていると、腰が痛くなった。横

になっても腰の痛みは引かなかったし編集者が居たという恐怖のため胃袋が縮み上がっていたしなので、私は夜になっても晚餐を取りに部屋を出ることをしなかった。そのまま、深夜まで寝ていた。ついさっき目が覚め、腰が痛くなくなっていたので居間へと降りてみたが、やはり何の用意もされていなかった。私にキノコを食べさせなくて良いのだろうか。というか、私はどうして毎日義務のように味の無い名前も知らないキノコを食べさせられているのだろうか。改めて考えてみたが、分からなかった。不条理とはこのことだろうか。

2011年9月4日(前書き)

これは作者の日記ではありません。創作です。

2011年9月4日

9月4日(日)

そういえば新学期が始まっていたのか。学校など、私とはかなり縁遠いものになってしまっているため、気づかなかった。気づく必要も無かっただろう。私がまだ正常で、学生と呼ばれる身分だった頃、新学期は……思い出したくないことに気がついた。新学期を迎える暗澹とした気分をまた味わいたくないなど無い。だからこれ以上学生時代のことは思い出さないことに決めた。そして私は二度寝した。

昨日の日記には「狂」の字が一度も出てきていないことに、今読み返してみても気がついた。昨日の私は正常だったのだろうか？ いや、ずっと狂っていた。狂ったままインターネットして狂ったまま図書館へ行って水をがぶ飲みして狂ったまま狂った人間に危害を与えようとたくらむ悪の担当編集に怯えて狂ったまま何時間も立ち読みしたのだ。何の実もない一日だった。きつと今日もそうだ。今日やったことといえば、電話を取ったことくらいだ。

大雨が降っていたので、今日は外に一歩も出なかった。晴れていても用が無ければ出ないが。そして電話があった。母がいつまで経っても出なかつたので私が居間に下りて受話器を取った。榎本なごみからだった。「ん。あなたが取ることは予想できていたよ」榎本なごみは預言者なのだろうか。「違うよ。ところでそっちは大丈夫？ 台風近づいてるらしいけど」榎本なごみの家にも台風が近づいている、ということになるだろう。「私の家は大丈夫。住んでないから」どうということなのか分からなかつたので、私は尋ねた。「だから、住んでないから。雨とか平気なんだ」分からなかつた。

珍しく母に話しかけられた。「夕飯、何か食べたいものとかある

？」冷蔵庫の中にあるもので作れるもの、と私はリクエストした。
その日の夕餉は、卵とトマトを混ぜ合わせて炒めたものと、焼いたキノコが出た。私が順調にキノコを食べ続けているから、母は無視をやめたのだろうか。とにかく、私は今日もキノコを食べた。

2011年9月5日(前書き)

この日記は架空のものであり、断じて作者の日記などではありません。

2011年9月5日

9月5日(月)

また月曜日だ。学校なんか行かなくなっただけでかなりの週数過ぎているのに、月曜日になると憂鬱になってしまう。これは何症候群なんだろう。そして、こう感じる私は果たして正常なのか。医師は狂っていると判断するけど、私は果たして本当に狂っているんだろうか。次の通院日は明後日だ。

悪の編集者の手によって破壊された腕時計を、今日、ようやくゴミ箱に入れた。今までは壊されたまま机の上に置きっぱなしだったのだ。しかし、このゴミ箱の中身を回収してくれる人物は、この家には存在していない。

なので私はいつものように、深夜、つまり9月6日になったついでにさつき、一階の居間のゴミ箱に自分の部屋のゴミ箱を移し変えに行った。そうすれば、母は黙って居間のゴミ箱の中身を回収してくれるのだ。これに気づくまで、私は捨てたいもので床が埋まりそうになって困っていた。

そしてゴミをゴミ箱に移し変えていると、偶然降りてきた妹と鉢合わせた。妹は眠そうな目で、私のことなど完全にいないかのようになり私から視線を逸らし、水を飲んで電気を消して自室に戻っていった。私がまだ居間に残っていたのに電気を消したのだ。妹の私に対する無視の度合いは徹底している。

これから眠ろうと思うのだが、さつきまで居眠りしていたため少しも眠くない。仕方がないのでこれから図書館で借りた本でも読むことにする。野崎まどという作家の「パーフェクトフレンド」とい

う本だ。内容はまだ読んでいないので全く知らないが、私はフレンドと言う言葉に惹かれてこれを借りたのだろうか。まさか。今さら友達なんか、私には無理だ。

2011年9月6日(前書き)

この文章は作者の日記ではありません。架空のものです。

2011年9月6日

9月7日(火)

そういえば昨日はハローワークの狂人専用窓口の私の担当者が出勤する日だった。行けばよかったのではないだろうか、と起きてからすぐに思い出し、後悔した。しかし今後悔してもどうにもならない。時間の無駄だ。しかし狂っているためやることの無い私には、無駄な時間が沢山残っている。だから思う存分後悔できるのだが、それは気分が悪い。でも後悔くらいしかやる事が……などといった負のスパイラルに脳が突入してしまいそうになったので、パソコンを立ち上げた。後悔するくらいならインターネットでもやっていた方がまだ健康的だろう、と思ったのだ。しかし早速気分の悪い書き込み(ニートに対する支援などさっさと打ち切ってしまう、といった意見)を見てしまい、さらに気分が悪くなったので読書に切り替えた。

昨日読み始めた野崎まど「パーフェクトフレンド」は、普通だった。文字は普通より大きく、なんと午前中のうちに読み終えてしまった。内容は、タイトルがそうなのだから当たり前なのだが、友情に関する話だった。狂ってしまった私などと友達になりたがる人間は、この世に存在していないだろう。もう悔しくもなんともないが、本当に、もうなんとも思っていない。

午後、午前中にやろうとして中断していたこと、つまり後悔をやっている、窓の外に猿が現れていた。まだ動物園に戻っていないのか、などと言った感想を抱きながら、部屋から見える機会の少ない自分以外の動くものを観察していると、猿は窓を叩いた。そして「そろそろ入れてくれませんか」と言った。何故？ と私は返した。「いや、まだ残暑が厳しいもんで」私の部屋にはエアコンが取

り付けられていて、これを利用することについて家族から咎められたことは無い。「当たらせてもらえませんかねえ、エアコンに」猿が言った。そうとしか考えられない風に、猿の口は動いていた。きつと狂っているせいで見えている幻覚だ。私はベッドに横になり、布団を被った。窓を叩く音は、しばらく続いた。

2011年9月7日(前書き)

これは作者の日記ではなく、フィクションです。フィクション日記です。

2011年9月7日

9月7日(水)

気力が出ない。何かをやるのも面倒だが、何かをやらないでいると気がさらに狂ってしまいそうで、しかし何かを始めるといふ行為には必ずストレスがついて回るものであり、その少しのストレスで狂いが極限に達してしまいそうで、空が青くて窓を開けると風が涼しくて叫んでみても家族の誰からの反応も無く、私の狂いは進行しているようだった。

病院へ行った。病院へ行く日は、居間に下りると机の上に診察費と保険証、それから診察券と狂人者手帳が置いてある。私はこれらを持って病院へ行き、診察費以外のものは病院から帰ったら机の上において自分の部屋に戻る。すると、晚餐の時間までに何者か(恐らく家で仕事をしている母)がいつの間にか回収している。

病院では、自分に気力が沸かない事を話した。「それなら、何か趣味を見つけると良い。お金がないなら、お金のかわらない趣味を」読書にもインターネットにも飽きた。何か他にやるべきことは無いのか。すると医師はこう言った。「それは自分で探しなさい」丸投げされた、と少なくとも私は感じた。丸投げされた、と私だけは感じた。私だけだろうか、この発言を丸投げと判断するのは。

家に帰り着くと、母と編集者の話し声が家の中から聞こえていた。だから私は逃げた。逃げても編集者は私の部屋に乗り込むかもしれない。そして何かを破壊するかもしれない。そう考えると編集者を家に置いたまま家を離れることがとても不安だった。しかし編集者に近づくのはもっと怖かった。

本屋で立ち読みして時間を潰して、夕方近くになってから家に戻ってみてもまだ編集者は家に居た。というか、私がこっそり家の扉を開けると、今まさに家を出ようとしていた編集者と鉢合わせた。「やあ」そう言っただけで編集者は私の腹を殴った。私は吐きそうになった。しかし、堪えた。「お、君、吐きそうになったね。君の胃液で僕の服が汚れたら、もっと殴っていたところだったよ」と、編集者は母と話していたのと同じトーンでそう言った。私は玄関で膝から崩れ落ちた。編集者はそんな私の脇をすり抜けて帰っていった。腹の痛みはなかなか引かず、晚餐を取ることも困難だった。だから今日も何も食べなかった。まだ痛い。気力が出ないとか言っている場合じゃないくらい痛い。痛いのは嫌だ。嫌だが、狂った私にそれを拒絶する権利はあるだろうか。

2011年9月8日(前書き)

これは作者の日記ではなく、フィクションです。作者又は主人公が完全に狂った場合、連載は終了させていただきます。ご了承の上、作品をご覧ください。

2011年9月8日

9月8日(木)

あれは何日前だったか。今日は日記を読み返すのが面倒な気分なために正確に確かめることはしないが、榎本なごみは「私、住んでないから」と発言した。あれは一体どういうことなのだろう。住んでない？ ホームレスだって道端に住んでいる。ホームレスでない人間は家に住んでいる。住んでいない、とは、一体どのような状況なのだろう。などと考えていたら、榎本なごみが家に来た。母が対応しなかったので私が応対したところ、玄関先に居たのは榎本なごみだったのだ。

部屋に上がってきた榎本なごみに相談してみた。狂った人間でも仕事をすることは可能なのか。そして質問している最中、ハローワークの狂人担当窓口の私の担当者の出勤日が明日であることを思い出した。あと、榎本なごみの私の質問に対する答えはこうだった。「人間には、可能なことと不可能なことがあります。信じていけば夢は叶う、だなんて、卑怯な言葉だと思いませんか？ まるで人間に無限の可能性があるみたいじゃないですか」意味が分からなかった。私はずうかと答えた。

二人揃ってもやるべきことは特に無かったので、それぞれ別の本を讀書して過ごした。私はおかゆまさきという作家の本を読んだ。ものすごい文体の本だった。ものすごく、頭が悪いことを追求した文体の本だった。頭が悪い文章を書くことも、出版することも、正気ではきつとできないだろう。この作家もこの作家の作品を認めた編集者も、この本を購入した図書館も狂っているのかもしれない。私も作家にならなくなるのかもしれない。「信じていけば夢は叶う、だなんて、卑怯な言葉だと思いませんか」榎本なごみがさつきと同

じことを口にした。

榎本なごみは夕方には家を後にした。そして夜になり、晚餐には、珍しく凝った料理が饗された。餃子である。キノコが入っているのかどうかは、中の具が細かく刻まれすぎているので分からなかった。あの狂いの原因と思われるキノコは味が無いのだ、みじん切りにされたら全く分からない。でもきつと入っていたのだろう。あのキノコを母が私に食べさせないとはとても思えない。ところで、どうして母は私にキノコを食べさせたがるのだろう。家族が狂った人間になって、何の得があるというのだろう。狂った頭ではそれを想像することができなかった。なので、考えないことにした。

2011年9月9日(前書き)

これは私の日記ではなく、完全にフィクションです。

2011年9月9日

9月9日(金)

そういえば、昨日は毎週木曜日に連れて行ってもらっている筈の保健センターのふれあいサロンへ連れて行かれなかった。いつも母に連れて行かれる時間に、榎本なごみが尋ねてきて、その間母は私に一切の干渉をしてこなかった。榎本なごみが来た事を、母は承知していたのだろうか。しかし、私を無視しながら親としての義務だけは無言で果たし続ける母が、私に対してそんな態度を取るとは思えない。狂ってしまった私なんかに気遣いなどということをやるとは思えない。母は一体どうしてしまったのだろうか。

昼間、水を飲み居間に移動すると、母と鉢合わせた。日中は翻訳作業でほとんど部屋に閉じこもっている母と偶然鉢合わせることは稀である。昨日は私を思いやってくれたような気がするのですが、もしかしたら無視されなくなったかもしれないと思い、私は一昨日のことを母に話した。あなたの担当編集に腹をしこたま殴られましたよ、と私は伝えたのだ。母は私を無視した。やはり昨日のことは思いやりではなく、単に連れて行くことを忘れていただけなのかもしれない。

それからハローワークへ行った。そして狂人専用窓口で私の担当者になってしまったパートタイム勤務らしい中年女性と話をした。そこで私は、狂人は作家になれるか、と尋ねてみた。「それは無理よ。狂った人間が編集者さんと打ち合わせができるとは思えないわ」と返された。そうだな、と私は思った。

晩餐にはやはり無味のキノコが出された。ここで少しキノコの描写をしておこう。いつも晩に出されるキノコは笠が大きく、赤色を

していてその中に白い斑点がある。インターネットでベニテングダケと画像検索したら出て来そうな形状と色をしている。しかし毒物を口にしたときのような反応は私の身には現れていないので、きっと違うだろう。精神に異常はきたしているけれど。

2011年9月10日(前書き)

これは作者の日記ではなくフィクションです。日記の書き手と作者とは何の関係ありません。全く関係ありません。

2011年9月10日

9月10日(土)

起きると母に久しぶりに話しかけられた。その内容は「これから取材旅行だから」というものだった。母は翻訳家である。翻訳家に取材旅行などと言うものが存在するのかしないのか、翻訳という職業に詳しくない私には分からなかった。もしかしたら旅行に行ったまま帰ってこないかもしれない、などという子供じみた想像で不安になりながら、私は母を送り出した。母が居なくなつた家には、父も妹も居なかった。二人とも、私が寝ている間にどこかへ出かけて行つたらしい。

冷蔵庫を覗くとそこには冷凍食品とキノコが大量に詰め込まれていた。これらの食事で凌げ、あとキノコもちゃんと食べる、そういうことなのだろう。キノコを食べると、私の気の狂いは加速する。しかし、食べなければならぬ。そう言い聞かせるような視線を、母は出かけに私に向けていた、ような気がするのである。狂っているせいでそんな被害的妄想が浮かんだだけなのかもしれないが、私はキノコをちゃんと食べることにした。食べないと後が怖いからである。

夜。父も妹も何の連絡も無く、帰ってこなかった。仕方が無いので冷凍食品のチャーハンを解凍し、キノコも茹でて食べた。いつぶりだろう、私が台所用品を使ったのは。狂っているくせに私は食べ終えた食器とキノコを茹でるのに使った鍋はちゃんと洗って拭いて食器棚に戻した。こんなにも正気的な行動が取れるのであれば私の狂いはやがて解消されるのかもしれない、と期待してみたが、すぐにキノコの影響が出て私は狂った。そして気がつくと、私は自分のベッドで自分に布団を巻きつけていた。狂っている間に私はどんな

行動を取ったのか、それはいつものように覚えていない。母はいつ帰ってくるのだろう。父と妹はどこへ行ったのだろう。私はこのまま死ぬまで放置されるのだろうか。こうして日記なんか書いている場合だろうか。

2011年9月11日(前書き)

この作品は作者の日記ではなく、完全にフィクションです。実在する人物・団体・企業とは一切の関係がありません。

2011年9月11日

9月11日(日)

朝、テレビを見てみるとプリキュアが戦っていた。宮崎はプリキュアの放送地域だったろうか、と思い、見終えてから検索してみると、放送地域ではあったが放送時間は土曜日の午前中ではなかった。私が住んでいるのは本当に宮崎なのだろうか、それとも狂ったせいで自分が住んでいるのは宮崎だと思い込んでいただけなのだろうか。一体どんな狂い方をすれば、自分が住んでいるのが宮崎だと思いつくようになるのだろうか。

私は宮崎について、思い入れも思い出したいことも一切無い。確かに私が生まれ、育ったのは宮崎で、宮崎から引越した記憶も無いのだが、その間に、墓の中に持って行きたい思い出は一切含まれていない。私の頭の中に入っているのは思い出したくないことばかりだ。宮崎という土地が私を責め苛んで狂わせた、と言っても過言ではないだろう、と私の狂った頭は考えている。郷土愛が無いのは狂っているせいだろう。それにしても今日は日記によく「狂う」という字が出てくる日だ。

こんな日はきつと嫌なものを見てしまうだろう、と思っていたら、窓の外に猿が現れた。猿は窓の外から家の中をじつと眺めていた。入れてもらいたそうだったので、家には現在誰も居ないことだし、思い切つて窓を開けてみた。すると猿はするりと家の中に入ってきた。それから猿は居間で夕方までくつろいだ。その間、私は窓を開けっぱなしにしておいた。

去り際、猿は「あなたは正常になれますよ」と私に言葉を残した。猿が喋ることくらいで、今更驚いたりしない。何せ私はくるっつい

るのだ、この猿は幻覚に違いない。猿の言葉も幻聴に違いない。私が正常になれるなんて、夢にも思っていない。自分が正常になった夢すら、一度も見たことが無い。

家族は今日も姿を見せなかった。夜、冷凍食品とキノコを食べていると電話が鳴った。榎本なごみからだった。「明日、料理を作りに行ってもいいですか」とまるで私の現在の状況を知っているかのような提案をしてきた。私は承諾した。どうせ誰も私を咎めたりしないのだ。このくらいの行動、取ったところで誰も困ったりしないだろう。

2011年9月12日(前書き)

これは作者の日記ではありません。登場する人物・団体・企業は架空のもので、団体も企業も今日の分には登場しません。

2011年9月12日

9月12日(月)

ゆらぎというものが人生を変えるとしたらそれはきつと傑作な幻覚であり、堂々巡りの末に出た結論としてはとても不適切とも言うことができるために日付が変わってからこの日記を書いている自分は本当は9月13日の人間なわけなんですが、どうにもこうにも腐っているような酒によっているような気がしてならない私の私の渡しの私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の太くの致す所にも大腸菌が至るところに至っていたい、そう言う願いを思っていたところでご不徳のいたすところだったりもするのかもしれないと考え

上の段落は、自分でも何を考えて書いてあるのか分からない。晩のキノコを食べて狂った状態で文章を書くところのようになってしまふ。だから私はキノコを食へたくない。しかし家族からはキノコを毎日食べるように、と強要に近い形で暗に言い聞かされている。だから、家族の中で最も権利のない私はキノコを食へ続けるしかないのだ。

今日も家族は帰ってこなかった。母も父も妹も、一体どこへ消えてしまったのか。警察に相談でもしてみようか、とも考えてみたが、警察に職業を聞かれたときに、私はきつと黙り込んでしまふ。それが事実であるくせに、私は自分が狂った無職の人間であることを他人に話すことを恐れているのだ。生意気にも。

昼間、ハローワークへ行こうとした。しかし、自分に一体何の仕事ができるのか考えをめぐらせてみたところ、上のような文章を書いてしまうほど狂っている自分にはきつと何もできないだろう、そう思ってしまったため、私は家から出られなかった。そこを我慢す

るのが社会人というものだ、ということは頭では分かっている。しかし、体が動かないのだ。実際に無能であるくせに、無能であることを社会から指摘されることを恐れているのだ。これは狂っているとかいないとかではなく、単に私が臆病なだけである。

2011年9月13日(前書き)

この日記は架空の人物のものであり、作者の生活とは一切関係ありません。

2011年9月13日

9月13日(火)

午前中に目覚める。すると母の部屋からキーボードを叩く音が聞こえてくる。母はキーボードを押す圧が強いのだ。それにしても、取材旅行に行ったのではなかったのか。いつ帰ってきたのか。私には一言も声をかけてくれなかった。午前の早い時間に帰ってきたのだろうか。私の身に一体何が起こったのか、理解ができない。

昼、榎本なごみが訪ねてきた。人が来たのに相変わらず母は部屋から出てこない。編集者が来たときくらいしか対応しないのではなにか、とすら思えてくる。それか、宅配便が届いたときくらいか。この日記を付け始めてから、家に一度も宅配便が届いていない。誰も何も、私の家に届けていない、ということになる。我が家の家族は世間から孤立しているのだろうか。それとも普通はそう言うものなのだろうか。

母は翻訳家であり、父は役所勤務の公務員であり、妹は大学生である。妹はともかく、父は母宛の贈り物がたまには届いてもいいものではないのだろうか。ということも榎本なごみに話してみると、「うーん、お歳暮なんかは届くんじゃない？ 年末に期待してみたら？」と返された。榎本なごみは私より世間というものに精通しているようだ。

榎本なごみはビニール袋に食材を入れて訪ねてきた。それは何だ、と私は玄関で訪ねた。「昼ごはん、作ってあげようと思って」と言つて、榎本なごみは家に上がりこみ、台所に入り込み、調理器具を勝手に使つて料理を始めた。上に書いた会話は、その最中に行われたものである。

榎本なごみが作った料理は野菜炒めだった。とても簡単なもので、私でも材料さえ与えてもらえれば作れそうなものだった。しかし他人の作る料理の味は新鮮で、普通の野菜炒めとは味が違うような気がした。きつと、気がしたただけだ。

私は基本、一日一食の生活を送らされている。だから、昼に食事を摂った今日は、夜になっても食欲が沸かなかった。だから私は、いつも晚餐を取る時間になっても居間に下りなかった。母は私を呼んだりすることはなかった。深夜になっても、ドアの前にキノコが置かれている、ということもなかった。ちなみに晚餐の時間の最中、床に耳をつけてみると、ここ数日姿を消していた父と妹の声も聞こえてきた。ここ数日、家族は一体どうしていたのか。訊いても答えたくないだろう。私は家族に無視されているのだから。原因を究明しようとしても、きつと無駄だろう。私は狂っているのだから。きつと幻覚だ。狂って幻覚を見たのだ。しかし、今日は狂いの原因と思われるキノコを食べなかった。明日の私は正気でいられるだろうか。今更正気になることに、私は耐えられるだろうか。

2011年9月14日(前書き)

この日記は作者の日記ではなく、
実在の人物・団体・社会とはま
ったく関係ありません。

2011年9月14日

9月14日(水)

昼、今日も榎本なごみが来た。昨日まで家族が消えていたことを話すと、「薬を飲み忘れたんじゃないやありませんか？」と言われた。しかし、私の認識している限りに於いて、病院で処方されているセルシンとドグマチールに幻覚を抑える作用は無い筈だ。家族が消えていた現象は、幻覚などでない。これは確信を持って言えるが、家族は自発的に姿を消していたのである。断じて、私が認識できなかったわけではない。と話すと、榎本なごみは首をかしげ、昼食の調理に戻った。今日も榎本なごみは昼食を作りに来ていたのである。そして私たちが昼食を食べ終えるまでの間、母は一度も部屋から出てくることは無かった。トイレに立つこともしなかったのである。母は榎本なごみを嫌っているのだろうか。それとも、何か理由があるのだろうか。

大体、榎本なごみはいったい何者なのか。先々週あたりから、ドンキホーテで私を付け回して以来私に構うようになっていたが、私は榎本なごみのことをほとんど知らない。とりあえず何かしら知っていたほうがいいだろう、と思ったので、まずは年齢を聞いてみた。すると榎本なごみは指を口に当て、「ひみつです」と言った。きつと言えないような年齢だから言わないのだろうか、と私は判断した。自信を持って言える年齢であれば、それをそのまま口にする筈だ。

今日も晚餐は取れなかった。榎本なごみの作った昼食が夜まで腹に残り続けたせいである。昨日に続いて今日もキノコを摂取しなかったことになる。このままだと、私の狂いも解消されたりするのだろうか。そんなことはない、そんな気がした。なぜなら、さっきまで私は狂っていたからだ。……さっきまで。朝の時点では、私は狂

っ
て
い
な
か
っ
た。
夕
方
か
ら
つ
い
さ
っ
き
の
深
夜
に
か
け
て
ま
で、
私
は
狂
っ
て
い
た。
私
の
狂
い
に
は
時
間
が
関
係
し
て
い
る
の
か
も
し
れ
な
い。

2011年9月15日（前書き）

この日記は作者の日記ではなく創作であり、作られた代物です。
今、同じことを何度も書いたような気がします。

2011年9月15日

9月15日(木)

見知らぬ男に殺される夢で目が覚めた。そして目が覚めた私は、夢の中で私を殺した男が見知らぬ男ではなく、母の担当編集者であることを思い出した。いったいどうしてこんな夢を見たんだ。そんなにあの編集者のことが怖いのか。と黙っている、階下から声が聞こえてきた。それは母と編集者が居間で打ち合わせしている声だった。

話がひと段落ついたので、母と編集者の話はいったん途絶えた。すると、これはもう「いつものように」と表現してもいいのかもしいれない、階段を上ってくる音が聞こえてきた。編集者が上ってくる音だろうな、と黙っていたらその通りで、編集者はまたしてもノックもせずに私の部屋の扉を開けた。今度は何を破壊するつもりなのか、そんなに私にストレスを与えて何のメリットがあるのだろうか。愉快なんだろうか。もしそうだとしたら、私も今度やってみようか。

夢の中で見知らぬ殺人者として登場した編集者は何も壊さなかった。その代わりに私に言葉をかけた。「僕は君が生きていることに価値を感じないんだよね」私も同感だったので、首を縦に振った。「狂ってるなら、薬、飲んでるんだろ」「あれ、効かないから。いくら飲んだって無駄だよ。君は気が狂った末に自殺して死ぬ。そして死体から漂う腐敗臭で、死してなお周りの人に迷惑をかけるんだ」ならば私にどうしろというのだ。「君、死ぬときは焼身自殺するんだよ。そうすれば死体の処理も楽だし、灰になるから腐敗臭もしない」まるで私が自殺することが決まっているかのような言い方だった。「決まってるじゃないか。頭狂者の末路なんか、みんな同じだ」

東京？「頭狂」それは私の知らない言葉だった。

晩餐にキノコが出た。赤く、白い斑点のある、味のないキノコを私は今日も食べなければならなかった。うどんの具として出されたのだから残すことは容易だったが、食べないでいるといつも冷たい家族の視線がさらに冷たくなりそうで、口に入れないわけにはいかなかった。これできっと、私は明日も狂うのだろう。そしてやがて焼却炉に身を投げ込むのだろう。今日、私は、編集者に頭の中を殴られた。

2011年9月16日(前書き)

これは作者の日記ではなく、創作であり、実在の人物、団体、会社名とはいつさいの関係が無いので残念だと作者は思います。

2011年9月17日(前書き)

この作品は作者の日記ではありません。実在の人物・団体・組織
名とは一切の関係がありません。

は小説である、とも本には書かれていなかった。もしかしたらノンフィクションかもしれない。ちなみに訳者は母だった。

2011年9月27日（前書き）

この日記はフィクションであり、作者とは何の関係もございません。
ご了承くださいませ。

2011年9月30日(前書き)

この物語はフィクションであり、事実・实在・実存などとは何の
関係ありません。

胃が荒れていたので晩餐を口に入れるのも一苦労だった。それでも絶食が続くと吐き気が収まらない気がしたので無理して食べた。胃が荒れているのにカレーだった。キノコはルーにみじん切りになっ
て入っていた。それから、晩餐後、狂う前に思い切ってパソコンのデスクトップ上の「マザー」というファイルを開いてみた。「1・キノコ人間の作り方について」から始まる、長い文章が続いていたが、そこまで見たところで狂ってしまったので、残りは覚えていない。

2011年10月10日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく、フィクションです。

2011年10月12日(前書き)

この話は私の日記ではありません。フィクションです。フィクションですってば。

ている、そんなコラムだった。面白い。

面白いコラムで気分が良くなっても飲酒は癖になっちゃってしまっているようで、帰りついたころには体中がアルコールを求めていた。しかし既に台所では母が晚餐の支度を始めており、台所に置かれている冷蔵庫から酒を盗んで飲むことは不可能に思われた。仕方がないので晚餐後まで我慢することにした。

その晚餐の席で、またしても家族以外の人間が同席した。それは中年の男で、名前を榎本なごみというらしい、母の新しい担当編集者だった。「君、先生のお子さん？」と新しい編集者は言うので、うなずくと、「君、狂っているね？」と、まるで医師のように私の症状を言い当てた。「君が作家になれば、話題になるだろうな」狂人を売りにして本を売るつもりか。世間が狂人が本を書くということに慣れたらどうなるんだ。「君に技量があれば、作家を続けられる。話題性だけの作家で終わったら、それまでだ」今までの編集者に比べて、この新しい編集者は随分と常識的だった。生活に起伏がなくなってしまうな、と私は無駄な心配をした。

2011年10月20日(前書き)

この作品は作者の日記ではありません。が、作者はアルコール依存になりかけています。

2011年10月20日

10月20日(木)

今日は今平日なので、母によってふれあいサロンへ連れて行かれた。抵抗するのもありが、と思ったが、それは面倒なのでやめておくことにした。現に今、こうして日記を書くのに手を動かすのも面倒くさくて仕方がない。今日はなぜか何をやるのも億劫で仕方がないのだ。

ふれあいサロンにまた新しいメンバーが来ていた。それはあの編集者だった。母を担当し、私に繰り返し暴行を与えた人物である。直接殴ったりしたわけではなかったが、あれは紛れもなく暴行だった。しかし狂って会社を辞めたからと言ってこんなにも早くふれあいサロンへ通う手続きがとれるものなのだろうか、と思っていたら、編集者は人を殴りつけた。どうやらほかの人間から声を掛けられ、その内容が気に入らなかつたらしい。話しかけられた内容は聞こえなかつたが、元編集者は「俺は狂ってなんかいない！」と言っていた。そんなことを言う人物こそが一番狂っているのである。自覚のある私なんかより始末に負えない。

それから編集者はふれあいサロンが内包されている保健センターの職員の手によってふれあいサロンを連れ出された。どこへ連れて行かれたのだろう、隔離棟かな、ここにそんなものあったっけ、などと考えながらふれあいサロンから出てみると、保健センターのロビーに、元編集者はおそらく担当者であろうと思われる職員と一緒に、ソファに座っていた。元編集者は何かを言われており、それを聞いている元編集者は首をうなだれていた。それからしばらく経つと、元編集者は保健センターから出て行った。来週も来るだろうか。だとしたら、迷惑なんじゃないのか。それを保健センターの職員に

尋ねてみると、「来週はおとなしくしてらつて。約束しましたよ」と言った。どうやら元編集者は来週も来るらしい。迷惑なんじゃないだろうか。

サロンで本を読んでいると、急に酒が飲みたくなつた。しかし保健センターに酒などない。このままではどうにかなくてはなつ、そう感じた私は、どうなつてもしまわないはずなのに、耐えきれなくなつて保健センターから外に出た。そしてその周辺をでたらめに歩いていると、比較的近くにコンビニあることを発見した。そのコンビニには酒が売つてあつた。しかし私は個人的に使える金を少しも持つていなかったので、酒の缶だけを眺めていた。誰かが表れて148円を恵んでくれることを期待しなすが、缶酎ハイの缶を眺めていた。もちろん誰も現れず、店員に冷たい目で見られていた。様ない気がする。結局私は、2時間近く缶を眺めていた。

帰るとさつそく私は家に常備されている酒を盗み飲んだ。そして酔つて吐いて、私は倒れた。目覚めて晚餐を済ませて、体のだるさは取れなかつた。だから私はこれを書いて現在の、とてもだるい。だから今日はもうこれで日記を終わることにする。

2011年10月21日(前書き)

この日記は作者の現実とは一切の関連性のない、架空の日記です。
もちろん主人公は作者とは違う人物です。

2011年10月21日

10月21日(金)

昔々、あるところにおじいさんとおばあさんとその息子と娘とたくさんの孫たちが住んでいました。孫たちが働くのでおじいさんとおばあさんは働かずに済みました。おじいさんは山へ芝刈りに行くこともなく、おばあさんは川へ選択へ行くこともなく、孫たちは誰一人として浜辺へ行く暇もないほど一生懸命働いていたので、その家族の元には何のファンタジーも起こらなかつたといえます。という昔話を思い付いた。これに少し脚色を加えれば面白くなりそうな気はするが、さてどうしたものか。

などという夢を見ているうちに私は病院で目を覚ました。昨日はキノコを口に入れていない、様な気がする。酒のせいで記憶があいまいである。キノコを口に入れていないとしたら何が原因で病院へ運び込まれたのか。酒が原因だろうか。それとも無意識のうちにキノコを口に入れ、それで狂ったせいで自分の身に何が起こったのか思い出せないでいるのだろうか。それが、今までのことは全部夢で、私は最初から入院していたのだろうか。私が日記に書き留めていたことには色々と不条理なことがあるので、それもあり得る。

病院からはその日のうちに退院させられた。医師から聞いた話によれば、私は急性アルコール中毒による二日酔いで気分が悪いと母に訴えていたらしい。母は深夜に気持ちが悪いと騒ぐ私に耐えられず、救急車を呼んだらしかった。帰ると、私は禁酒を命じられた。母の目を盗んでこっそり冷蔵庫を覗いてみると、酒は撤去されていた。これを自縄自縛というのだろうか。それとも、当たり前前の処置と言ったほうが正確だろうか。

酒がない、逃避するのに最適なものがない、そう考えるだけでイライラした。イライラするので私は本を読むことにした。本に集中している間はイライラが少しは解消されるのが救いではあったが、読み終わるとまたやるのがなくなった。そこで、もう夕方になっていたが、散歩に出かけることにした。すると、犬と数回すれ違った。犬にはすべてリードと飼い主がくつつけられていた。私が子供のところは、この辺りにも野良犬が出ていたような気がするのだが、最近は少しもそんなことが起こらない。

晩餐はいつもより多めに、キノコをいつもより多めに食べた。すると満腹のせいか、いつもより狂ったせいか、私は眠ってしまった。夢は見なかった。次に起きてもまた病院にいるんじゃないか。そんな気がした。

2011年10月22日(前書き)

これは作者の日記ではなく、創作作品です。

屋の中で朦朧とベッドに潜っていた。

晚餐の席で母に伝えられて明らかになったのだが、榎本なごみは一日中家にいたらしい。私の家族に何を言ったわけでもなかったらしいが、榎本なごみは母に晚餐を作ってもらっていた。私の知らぬ間に。榎本なごみが何なのか知っているのか、と母に尋ねてみた。

「知らない」と帰ってきた。じゃあどうして食事を響したのか。「不思議ねえ。でも、あの娘、不思議な魅力があるのよね」魅力に対して不思議なんて言葉は適応されるものではない。私は榎本なごみが帰ってから数時間後に晚餐を食べ、それに混じっていたキノコで狂ってまた寝て、そしてついさっきまでまた寝ていた。

2011年10月23日(前書き)

この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件とは一切の関係がありません。

2011年10月23日

10月23日(日)

そんなにやることがないなら本でも読んでいればいいのに、最近
は昼も夜も寝てばかりいる。こうなったらいつそのこと、このひた
すら眠っているという自己の姿を現代アートとして提出してしまう
というのはどうだろう、と思いついた。ステージ上ではバンドが激
しい演奏、そして老人ラッパがライムで現代社会をディスリ、お
行儀のよろしくない格好をしたヒップホッパーたちがリズムを刻ん
で体を動かしている、そんな中心で、私は布団を敷いて眠っている
のである。この異様な空間で寝るといふ行為。この非常識さこそが
現代アートたり得るのではないか。そんな夢を見た。狂った人間の
夢なんてこんなものである。

夢に出てきた老人ラッパのデイテイルはかなりしつかりして
いて、顔中ぼうぼうに伸びた髪の毛やもみあげや髭を編みこんで顔
の8割を隠し、それでいて激しい声で……夢の話はむなしいで現
実の話へ移ろうと思う。現実の話も大概むなしいものであるが。現
実がむなしくない人間なんかこの世に数人しかいない気がする。つ
まり実は私は正常なのではないか。

現実の世界で、私は少しウォーキングを行つた。寝ている間に歩
いて、歩き終わって帰ってきてまた寝たのである。キノコを食べた
直後眠るように狂ってしまうという状況を回避するために、寝だめ
という策を思い付いたのと、単純に眠いという二つの原因が重なっ
てこんなことになったのである。だから私は歩いた。歩いている間
は誰ともすれ違わなかったし、何の特別なことも起こらなかったの
で、この段落は一行で済ませていいはずなのに、こうしてたらだら
と書いてしまっている。そんなに日記を書いていたのか、私は。

じゃあ小説家にもなればいい。きつとなれないと思うが。編集者が狂人の書いた小説を読んでもくれるとは思えない。

小説といえば、今日は図書館まで歩いたことを記録し忘れていた。昨日図書館へ行かなかったので、今日行ってみよう、と思い、いつもは自転車で通る道をわざわざ時間をかけて歩いたのである。そして図書館でペンネームを猿という作家の別の小説を借りてみた。「このキノコ人間が、」という、児童文学とは明らかに方向性が違らしい、吐き捨てるような言い方のタイトルだった。

そして晩餐后、眠らずに本を読もうとしていたのに、結局つきさつきまで意識を失っていた。またキノコを食べて狂って寝てしまっていたのだ。これを防ぐ方法はないのか。本当はないのか。

2011年10月24日(前書き)

この作品はフィクションです。実在する人物・団体・事件とは一切関係ありません。

2011年10月24日

10月24日(月)

午前中は寝ていた。このまま眠るように死ねたら、死にざまとしてはましなほうだ。しかし私はまだ死にたくはない。そして夢を見た。雑誌の文字が小さくて、顔を近づけている、という、非常に面白くない夢だった。どうしてこんなことを夢に見るのか。私は自分の金で雑誌を買って読む、というここ数年か月実行できていない行為にあこがれを抱いているのか。それにしても夢にしては現実的すぎやしないか。そしてあまりにもつまらなくはないのか。これから雑誌に関連した何事かが起こる前触れなのか。そうとでも妄想しないとこの夢があまりにも不憫でならない。つまらなさのあまり、夢に対して感情移入してしまった。

午後、ハローワークへ行ってみた。今日は私の担当となった中年女性の担当者が出勤している曜日だからである。そこで仕事を見つけてもらおうとしたが、そこで私は弱音を吐いてみた。狂ってしまった自分が働ける自信がない、と。「やる気がない限り、働こうとしても働くなんでできないわよ」と返されてしまった。私はきつと、現状に甘えているのだろう。現状が悪くないと、心の奥底では感じているのだろう。酒を禁じられ、金銭の所持を禁止され、やることと言えは寝るか図書館で借りた本を読むか、そんな寂しい老後のような現状に。打開したくないわけがなかった。

ハローワークからの帰り道、現状の象徴とも言い表せる榎本なごみとすれ違った。彼女は高校の制服を着ていて、二人の友達らしき同じ制服を着た人物と並んで歩いていた。私とすれ違う際、視線すら向けなかった。きつと私と知り合いであることが友達に露呈することが恥ずかしいのだろう。私だって自分が狂っていることが露呈

するのは恥ずかしい。そして働いていないことと、働く気がないことを言い当てられてしまったことが恥ずかしい。この宮崎という田舎において、働いていない人間は全員不審者である。そんな不審者たる私なんかには道端で親しげに話しかけてくる人物が表れでもしたら、まず私のほうが不審がる。きつとろくな目的ではないだろうか。

夜、それも深夜、晚餐が終わっていつものキノコのせいで気を失って目覚めてから、電話がかかってきた。出てみると、榎本なごみからだった。「今日は無視してごめんなさい」と謝罪された。榎本なごみは私に気を使いすぎなのではないだろうか。それにしてもどうしてこんなに気を使ってくれるのか。私は高校生の命を救った覚えなどないし、高校生ではない人物の命を救った覚えもない。榎本なごみは私に恩があるわけではないのだ。私が一体何をしたというのだ。不審である。

2011年10月25日(前書き)

この作品はフィクションであり、作者の生活とは一切の関係がありません。

あ、不思議なことではない。テレビでなめくじ撃退用品のCMをやっているのを見たこともあるし、なめくじというものは基本的に人に嫌われるものなのだろう。私と一緒にだ。

2011年11月1日(前書き)

今日の更新内容は現実とは一切の関係がありません。もちろん昨日分も、一昨日分も、それ以前もです。

とに腹を立てて「じゃあもう作らない」と言いたいがために、こんなメニューを響したのだろうか。「文句ないの？」と訊かれた。妹に。久方ぶりに妹から話あつけられた。なので私はびっくりし、しばらく言葉を返せないでいた。数分立ってから、やっと、ある、と一言だけ返すことができた。「じゃあ言えば？」そんなことを言う資格は私にはない、と伝えた。「へー。どっちつかずなんだ。じゃあ死んだら？」妹はよく私に死ねという。子供のころから言われ続けてきた。なので慣れている。慣れているので傷つきもしなかった。

てみなさい」父は言った。父はそんなにパソコンが好きだったか。頭の中を探ってみたが、今まで私にそんなそぶりを見せたことはなかった。新発見である。

2011年11月11日(前書き)

この物語は作者の日記ではありません。作者と登場人物には何のかかわりもありません。

2011年11月12日(前書き)

この作品はフィクションであり、
実在する人物・団体・事件とは
何の関わりもありません。

2011年11月14日(前書き)

この作品はフィクションであり、登場する人物・団体・事件は架空のものです。

手続きを取ることになるだろう。親には長生きしてほしい。いや、狂った子供を抱えているのだから、いつそ死んだ方が楽、とか考えられているかもしれない。……そんなわけがない。もしそうだとしたら、親は自殺しているだろう。しかし親は生きていて、私に一日一食を与え続けている。親は私をどうしたいのだろう。

画期的な視界の改革法を編み出した。榎本なごみが目の前にいるときに目を閉じて深呼吸し、ここには誰もいない、と信じ込んでから目を開けると、榎本なごみの姿が消えるのだ。逆に、目を閉じて榎本なごみはここにいて、と違って目を開けると榎本なごみはここにいる。私の目は新たなステージへと登ったのだ。狂いの新たなステージへ。「どうしたんですか」と榎本なごみに言われて、私は目を覚ました。「寝てるんだか寝てないんだか分からない瞼の動きをしていたので。起こしてしまっただけでしたらごめんなさい」気が付けば私は晚餐を終えて自室で気絶していた。今日見たものや考えたことは、どこまでが夢だったのだろう。これは狂いが一段階進んだ証拠かもしれない。

2011年11月23日(前書き)

この作品は作者の日記ではありません。

2011年11月23日

11月23日(水)

ところで私はこんな日記帳に生き恥とも呼べる生きざまをさらして、いったい何がやりたいのだろう。自分が書いている日記の存在意義について疑問に思えてきた。が、すぐに思い直した。意義なんてない。暇だからやっているだけなのだ。狂いが治ってまた仕事を始めれば、私は日記を書かなくなるだろう。

祝日である。そんなめでたい日に、私は榎本なごみに襲われた。気が付けば、榎本なごみは私の首を絞めていた。絞めながら榎本なごみは言った。「今、死にたいって思ったでしょう。思いましたね？」自分がどうして抵抗しないのか、自分でも不思議だった。きつと死にたかったからだろうな、と客観的に予想することは、今ならできるが、その時の自分の心の内が分からない。

ふと気が付けば、私は昼寝をしていた。隣に榎本なごみが寝ていた。私が目覚めると同時に榎本なごみも目を覚まし、「ご家族はどこかへ出かけましたよ」と教えてくれた。私は榎本なごみに殺されかけていたはずではなかったか。「そう思うんですしたら、殺されかけていたんじゃないですか？」どうして急に態度が投げやりになるのか。

帰ってきた母により晚餐として出されたのは、出かけた先で買ってきたというたこ焼きだった。もちろんキノコも添えられていた。私は黙ってキノコを食べようとしたが、食卓の正面には榎本なごみが座っていた。榎本なごみは今日も何も食べる様子を見せなかった。私のためしにキノコを差し出してみた。「いいんですか？じゃあ、いただきます」榎本なごみは私の手からキノコを食べた。

そしてキノコをすべて榎本なごみに食べさせ、たこ焼きは自分で食べ終え、自室に戻ると私は狂って気絶した。なぜか。

2011年11月24日(前書き)

この作品は誰かの日記ではありませんが、作者の日記ではありません。

ある。私は目を閉じ、榎本なごみは私の背後に立っている、と思いい込み、瞼を開けた。榎本なごみは「大丈夫ですよ、お母様があなたを捨てるわけがありません」と言った。それは私にとって都合のいい言葉だった。

2011年11月25日(前書き)

この作品は作者の日記ではありません。フィクションです。

2011年11月25日

11月25日(金)

またしても夢の話である。母と編集者の密会の夢を見た。母とあの編集者、私の腕時計を最初に破壊した編集者が浮気をしている、という夢を見て目が覚めた。昨日の深夜、母が出かけたのも、もしかしたら。そんなことを思っていると榎本なごみが大丈夫大丈夫うるさいので姿が消えるよう念じて目を閉じ、そのまま横になった。

すると違う夢を見た。作家になった私が仕事をしている夢だった。それも、書店巡りの営業、という、やったこともないのに自分に向かない仕事を涙目になりながらこなしている、という夢だった。作家の仕事に書店巡りの営業、なるものがあることを、私は先日インターネットで知ったばかりだった。だからそんな夢を見たのだろう。夢から覚めた私は、小説、という言葉ばかりを思い出し、我慢できなくなって本に手を伸ばした。「このキノコ人間が。」の続きを読み始めた。しかし、一向に本は終わる気配を見せない。そこで重力に任せてパラパラと一気にページを進めてみる。そして気が付いた。この本にはページ数がない。そしていつまでもパラパラとめくられ続けている。私は怖くなったので紐を挟むことも忘れて本を閉じた。

晚餐に餃子が出された。恐らく冷凍のものだろうと推測されるものだった。それからゆでたキノコが添えられていた。どうしてわざわざ調理してまでキノコを食べさせたがるのだろうか。私は一昨日と同じくキノコを再出現させた榎本なごみに食べさせてみた。「私が食べてもあなたが食べても同じことですよ？」榎本なごみは言った。私はその意味を理解はしていたが、それでも、自分の口にキノコを持っていくのには抵抗があったのだ。

2011年11月26日(前書き)

この作品はフィクションであり、
実在の人物・団体等とは一切の
関係ありません。

2011年11月26日

11月26日(土)

図書館へ本を返しに行った。使用手段は自転車である。自転車は相変わらず好きにはなれないが、少し前よりは使用するのが楽になった気がする。酒を飲まなくなったおかげだろうか。まだ酒がどうか言っているのか、私は。そんなに酒が飲みたいのだろうか。とにかく私は自転車で図書館へ本を返却しに行った。返却した本は「このキノコ人間が。」という本である。どこまでめくっても終わりがなかったのが怖くなって、返却することに決めたのである。しかし、受付へ持っていくと、職員に「こんな本を貸し出した記録は残っていません」と言われてしまった。その本を調べてみると、なぜか図書館の刻印が消えていた。もしかしたら何らかの偶然でこの本を手に入れてしまっており、それと借りた「このキノコ人間が。」を取り間違えて持ってきてしまったのだろうか、と思ったが、「貸し出した記録ありませんね」とのことだった。仕方がないので持って帰った。ついでに他にいくつかの本を借りた。

いい加減榎本なごみについて決着をつけなければならぬ、と妙な使命感に支配された。榎本なごみは居た方がいいのか、居ないほうがいいのか。決めなければならぬ。私は目を閉じ、そう考えてから目を開いた。すると榎本なごみは目の前に座っていた。私の進む先は狂いの道に通じていることがよくわかった。もうどうとどもなれ。

晚餐は流水麺と思われるざるそばが出された。もう寒いのに、である。めんつゆの中にキノコが沈殿していた。私はそれをつまみ上げ、口に入れた。私はもう決めたのだ。狂いの道を進むことを。決めたらきつと進行は早まるだろう。きつと一週間以内に、私は日記

が書けなくなるほど狂うだろう。

2011年11月27日(前書き)

この作品はフィクションであり、登場する人物はすべて架空のもので
す。

りのない本を読むのは苦痛なので、この本はしばらく放っておくことにした。思い切つて捨てられないのが私という人間である。これは狂っているとかいけないとかは関係ない。

妹が珍しく、しかも深刻な様子で私に話しかけていた。母が知らない男とデートしているのを目撃してしまった、というのである。何気なく出かけていたら、母と知らない男が腕を組んで歩いているのを見た、という。「腕組んで歩くんなんて付き合ってる以外考えられない」のだそうだ。妹の想像力は、私に、ああ、この人間は私の家族なのだなあ、と思わせた。

晩餐の席で妹が目撃したことを母に伝え、本当にその男と付き合い合っているのか、と尋ねてみた。「ああ、お父さんには黙っていてね」と母は言った。「離婚の手続きって面倒なのよ」父にばれると話が離婚方面に富んでしまつらしい。父は嫉妬深い性格をしていたのか、と、こんなに長い間家族をやっていて初めて知ることになった。

2011年11月28日(前書き)

この作品はフィクションであるため、登場する人物・団体等は架空のものです。

2011年11月28日

11月28日(月)

久々に吐きそうである。それもこれも酒が原因である。どうやって酒を入手したのかは、書きたくない。とても卑怯な手段を使ったからだ。具体的な方法はとても書くのに勇気が必要なほど卑怯である。とても親不孝なことをした。しかし親は私を大事にしてくれてはいないので、別に孝行する必要はないのではないのか。単なる言い訳である。

起きたら家に人の気配がなかったのがそもそもの原因である。どうも人がいない気がしたので、母の部屋を覗いてみると、いつもはそこで仕事をしている母の姿を見つめることができなかった。家に一人、の状況だった。そこで私は机を漁った。すると母の財布を見つけた。きつと出かけているはずなのに、母は財布を二つ持っているらしい。その証拠に見つけた方の財布には少額しか入っていないかった。しかし三千元も入っていればこれをコンビニへ持って行って酒を入手することくらいは可能である。迷った拳銃、私は榎本なごみを出現させた。「やめましようよ、犯罪ですよ」と言わせた。そして私は結局コンビニへ向かった。榎本なごみの健闘むなく、私は愚行に走ってしまったのであった。

母は夕方ごろ帰ってきた。何があつて家を留守にしていたのか尋ねてみると、「デートよ、お父さんには黙っていてね」と帰ってきた。母は浮気にお熱のようで、おかげで罪悪感も吹き飛んだ。親の財布から148円(ビール1本分)勝手に使ったくらいがなんだ。このくらい浮気を黙ってやる代金としてはお釣りをもらつてもいいくらいだ。

母が返ってくる夕方までの時間は、酔いながら文章のネタ出しをやってみた。しかし酔った頭ではまともな考えが浮かばず、結局インターネットを巡回しただけで終わった。

晚餐の席、今日は父が仕事から早く帰ってきていたので、父が同席していた。その父に、もし母が浮気をしていたらどうする、と尋ねてみた。148円ぶんの仕事を不意にしかねない蛮行である。父は、「はは、ははは」と笑った。それだけだった。

2011年11月29日(前書き)

この作品はフィクションであり、登場する人物・団体等は架空のものです。

2011年11月29日

11月29日(火)

榎本なごみに自由意思は存在しているらしいことを、今日は思い知ることができた。いつものように昼前に起きて水を求めて台所まで降りると、父と母が深刻そうな顔をして食卓で向かい合っているのを見つけた。父とは母は別れるの別れないのと深刻な話題を話していた。それを聞いていると背後から榎本なごみが現れた。「すいません、どうしても私は黙っていることができませんでした」と榎本なごみは告白した。どうやら榎本なごみが母の浮気を父にばらしてしまっただけらしい。「ええ。残念ながら、私は操り人形とはちよつと違う存在ですから」意外だった。「意外ですいません」榎本なごみの正体が、再び謎に包まれた。

両親の話し合いは難航し、火が陰ってきても話がまとまる様子を見せなかった。父は母を責め立て、八八堂々たる言い訳でそれに立ち向かった。やがて妹が学校から帰ってきた。榎本なごみが母の浮気を父にばらしてしまっただけらしいことを妹に伝えると、「えつちやん、何やってんの？」と妹は榎本なごみを責めた。榎本なごみは妹に平謝りだった。ますます榎本なごみの正体が不明になっていく。

そんなわけで家庭が混乱していたので、晚餐は出なかった。空腹のまま深夜を迎えて、これを書いている。今日はキノコすら食べていない。よって気絶せずに夜を超えてこの深夜を迎えている。榎本なごみは風呂に入っている。妹と知り合いのあの少女は一体何者なのか、今のところ不明である。榎本なごみが上がったら、私も風呂に入るつもりでいる。

2011年12月1日(前書き)

この作品は架空のものであり、作者の日記とは性質を異なるものです。

母譲りのものらしい。

2011年12月2日(前書き)

この作品は作者の日記ではありません。

亡劇を終わらせるつもりはない。男に捕まる直前で再び心変わりさせ、逃亡を続けさせるつもりである。しかしいつかは終わらせなければならぬ。物語は終がないと成立しないものなのである。

新たなI E導入のせいで環境が変わってしまったことを痛感した。今日になって、やっと気がついたのだ。今週はふれあいサロンに連れて行かれなかった。その代わり、今日は家にいた母に命じられた。「歩こう会にはいかないの？」と。そして家を追い出された私は、どこへ向かえばいいのかわからなかった。歩こう会とはなにか。どこに存在するものなのか。仕方がないのでしばらく外をふらふらと歩いてから家に帰った。

晚餐の席で、両親から発表があった。とりあえず来週から別居することになった、とのことだった。母は近所のマンションに引っ越し、父はこの家に残るらしい。私は来週までに結論を出すことを迫られた。家に残るか、マンションに映るか、である。

2011年12月3日(前書き)

この作品はフィクションです。実在する人物・団体・場所等には一切関係ありません。

2011年12月3日

12月3日(土)

今日は文化の日である。違う。それは先月の3日である。こんな出だししか思い浮かばない私の脳は壊死しているのかもしれない。とにかく私は一日かけて引越しの準備を進めた。とはいえ簡単なものだった。なにせ部屋のは編集者にほとんど破壊されてしまっているのだ、残っているものといえばいくらかの着替えとノートパソコンくらいしかない。ダンボール一箱に全ては収まった。

私はこの家に残るかマンションに移るのか、父を選ぶのか母を選ぶのか選択を迫られ、マンションに引っ越すことを選択した。結論を出すのに時間がかかるだろう、と昨日書いておきながら今日になると結論が出ていた。こんなことを長々と考えていても気分が沈降するだけだということに気がついたのだ。狂っているくせに今日の私は賢いな、などと自画自賛しながら、私はダンボールに荷物を詰め終え、それを部屋でデスクトップパソコンを解体していた母に告げた。「そう。ついてくるのね」と母は言った。きつと父を選んでも父は「そうか。残るのか」と言っただろう。私が付いてくることよって親にもたらされる利益は皆無である。きつと選ばれないことを期待されていたに違いない。

「環境が変わるのは、いいことですよ」と今日も家に居座っていた榎本なごみ入った。榎本なごみが通っている高校は土曜は休みらしい。最近の高校で土曜が休みなのは珍しいと思うのだが、きつとそれ相応の偏差値を誇る高校なのだろう。どんな子供でも受け入れますよ、という、門戸の広い高校。それがいいことなのか悪いことなのかは、狂っている私には判断しかねる。

晩餐の席に、今日は家族が一堂に会していた。「どうして母親について行く気になったんだ」と父は私に、母の名前を呼びずに尋ねた。「キノコを食わされるんだぞ」それもそうだな、と思った。しかし、父も母も、私が付いてくることを望んでいないだろう。ならばどちらを選ぼうと、私にとっては同じことだ。どちらにしる邪険に扱われるだけなのだから。と言ったら父は私を殴ってきた。「子供を思わない親がいるか！」じゃあ今の扱いは一体なんなんだ、と聞いたかったがさらに殴られそうだったのでやめておくことにした。

2011年12月5日(前書き)

この作品は作者の日記とは違います。

2011年12月5日

12月5日（月）

朝から起きていなければならなかった。こんなこと二日連続である。昼前に起きるような生活を続けていた身にはつらいものがあるが、そこは仕方がないだろう。なにせ回線工事人が来るのだ。起きずにいるわけにはいくまい。インターネットは重要である。

回線工事人は予定していた時刻通りにやってきて、私の部屋になぜかあった電話線にモデムを設置し、帰っていった。それから昨日母に渡されたインターネット接続マニュアルとインターネット接続ディスクを駆使し、2時間ほどかかってインターネットに接続することに成功した。私はパソコンの扱いが上手いわけではないので、この程度の時間はかかるのである。インターネット内の話題は、一日空けただけなのに大きく変わっているようだった。しかし違和感に戸惑うよりも、インターネットに無事接続できたことの喜びの方が大きかった。

インターネットではばらくいつも見ているサイトを巡回しているうちに、歩こう会のことを思い出した。早速「歩こう会」と検索してみると、近所にそのような団体が存在していることがわかった。地域活動支援団体、と銘打っていることもわかった。今日ものその会は相談室と談話室を完備して開かれているらしい。もう午後3時だったが、私はそこへ向かうことにした。近かったし。

到着してみると、そこはいかにもボランティアがやっているような感じの垢抜けない雰囲気のカフェで、その奥から私の担当者を名乗る人物が現れ、私は相談室に連れて行かれた。「何か言いたいことがあるんじゃない？」と妙なフレンドリーさで私の担当者は言った。

どうして自分がここに受け入れられているのか、と訪ねてみた。「登録したじゃない」と担当者は身に覚えのないことを言った。それから私は帰った。母に訊いておきたいことができたからだ。

晩餐の席で早速訪ねてみた。すると母は自室に戻り、登録書を持ってきて私に見せた。その紙には確かに私の筆跡で私の住所氏名年齢この施設を利用したい理由などが書き込まれていた。「住所変わったから、今日行ったのなら、それを報告して欲しかったんだけど」と母は言った。今日はもう晩餐に出されたキノコを口に入れてしまっていたから、明日に回すしかなかった。

2011年12月6日(前書き)

この作品は作者の日記ではありません。

2011年12月6日

12月6日(火)

インターネット調べによると歩こう会は月曜から土曜までやっていて、日曜と水曜が休みらしい。つまり今日もやっているらしいとのことなので、今日は歩こう会へ住所変更の連絡とその他確かめたいことを確かめるために向かった。到着すると昨日と同じ私の担当者名乗る人物が現れた。しかし今日は相談室には連れて行かれなかった。他の人がほかの担当者と相談中なので使えない、のだそうだ。住所が一軒家からマンションに変わったことを伝えると、書類を手渡されたので、私はそれにマンションの住所を書き入れた。それから昨日は入らなかつた談話室なるところに入ってみただが、そこでは数人のぱつとしない見た目の、おそらく私と同じく狂っていると思われる若者たちが知らないアニメの話題で盛り上がっており、入りづらかつたので私はすぐに帰った。

「それは大変でしたねえ」帰ってくるとりビングで榎本なごみが煎餅を食べており、どこへ行っていたのか尋ねられたので答えるこんなことを言われた。「本当に登録してよかつたんでしょうか？」私は登録した覚えはない。「そうですか。でも、世界って自分の知らないところで大半が動いているものですからね」それでも少なくとも自分が触れる範囲くらいは自分で把握しておきたいものである。

晚餐の席で榎本なごみが「ちょっと帰っていいですか」と私に尋ねた。私にそれを止める権利などあるものか。榎本なごみは部屋から出ていった。晚餐が終わってキノコのせいで倒れて深夜に起きてこの日記を書こうとすると、榎本なごみが私の布団の隣に自分のものらしい布団を敷いて寝ていた。どうやら自分の布団を取りに一旦帰ったらしい。帰った、のか。今の榎本なごみには自宅が存在する

のか。だとするなら、どうして私なんかにかまつのだろっか。

2011年12月7日(前書き)

この作品は作者の日記ではなく、
実在する人物・団体等とは一切
関係ありません。

2011年12月8日(前書き)

この作品は作者の日記どほりそのままです。

2011年12月14日(前書き)

この作品は作者の日記ではなくフィクションであり、登場する人物・団体等とは一切関係ございません。

2011年12月16日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。

2011年12月17日(前書き)

この作品は作者の日記でも夢日記でもありません。

食事を終わらせ、自分の部屋に戻ってから口の中のキノコを吐き出してゴミ箱に入れてみた。しかしゴミ箱の中身は母が回収する。このままではキノコを食べていけないことがばれてしまうことになる。まあいい。どうとでもなればいい。

2011年12月18日(前書き)

この作品は作者の日記でもなんでもありません。

ここ最近幻覚らしい幻覚を観ないことを晚餐の席で母に報告してみた。「あら、そう」と母は言った。もう狂っていないのかもしい、などと心に思っていない憶測も口にしてみた。だからキノコはもう不要かもしれない、と提案を試してみた。「明日は朝も食べなさい」と母は言った。明日の朝に私は何を食べさせらるのだろうか。私は不安になり、口に入れたキノコの味も分からなかった。

2011年12月28日（前書き）

もうすぐ年越しですが、こんな日は年明けが遠くに感じられるものです。ところでこの作品はフィクションであり、登場する人物・団体・企業とはなんの関わりもありません。

晩餐に出されたのはキノコの炊き込みご飯だった。炊き込まれていてもキノコ入りの料理は無味だった。珍しくもないことなのだが、晩餐はそれ一品のみだった。晩餐后、理由は不明だが自室に帰ると涙が出てきた。榎本なごみが居なくなつて本心では寂しいのか、それとも晩餐がわびしかったから泣いているのか、理由は不明だがとにかく悲しいので泣いた。

